

カウベルの乾いた音が七瑠美の座っている奥まったテーブルのところまで届く。店員の客を迎える声がないということは、この店主の遅い出勤とみて間違いないだろう。それをきっかけに七瑠美はノートパソコンのキーボードを打つのを止めた。

出窓に置いてあるアンティーク時計を見るとはなしに視界に入れる。あと五分足らずで午後三時になる。知らぬ間に時間が経っていた。少し休憩しようと腕を伸ばしたり首をまわしたりした。この店でパソコン仕事をする集中できるのだ。

ダークブラウンの家具、ダマスク模様の壁、ガラスセードのペンダントライト、そしてカウベルのある昭和レトロなこの喫茶店でノマド作業をするようになったのは、グルメ雑誌の会社に勤める大学の先輩がこの喫茶店の取材に来たことだった。七瑠美はフリーランスのカメラマンとして同行したからだ。半年前まで写真スタジオで勤めていた。同期の男子たちは次々独立や大手のスタジオに引き抜かれているなか、七瑠美は四年経ってもアシスタントから抜け出せなかった。そもそもステップアップに有効なコンテストにエントリーすることを七瑠美だけが許されていなかった。「お前はまだ早い」とスタジオのオーナーに言われるのが常だった。「どうなればコンテストに応募できるんですか？」と訊いても、「それは自分で考える」と突き放された。

ある時、独立して活躍が眩しい同期の男子と仕事先でばったり出会った。その流れでお酒を飲みに行ったら、「お前がなんでアシスタントから抜け出せないか分かるか？」と言われた。あまりに直截な問いに何も返せずにいると、「俺たちはあのオーナーがどれほどの実力があるのか見極めるところから入るけど、お前はあのオーナーに認められようとするところから入っているだろ。だからアシスタントを抜け出せないんだよ」と言われた。瞬間に居酒屋の騒めいた音が消えた。七瑠美は考えの浅薄さを一蹴されて固まってしまった。

同期の男子と同じように仕事をこなしているのに自分だけが置いていかれるのは動こうとしていなかったから？ いくら考えても正解はでるよしもないが、変わるためにはオーナーの許可待ちではなく場所を離れることだったと分かった。その月の終わりには退職願いを出し、フリーランスのカメラマンになった。

丁度、いまセレクトしてまとめた写真データを彼宛てに送るところだ。七瑠美を水に落としはしたが手を差し伸べて、引き上げてくれたのも彼だ。さらに彼は、「同業同士は地歩を固めてからが仲間だからな」と喝を入れてくれた。まずは生活のため、大学の先輩や同期の彼、不思議なことに、元職場のスタジオのオーナーからも仕事をもらっている。

顔なじみの店員さんがコーヒーマットを持ってやって来た。

「コーヒーマット淹れましょうか？」

ここは一〇〇〇円のプレートランチに二〇〇円プラスするとコーヒーのお代わりが無料になる。七瑠美はこくりと頷いた。酸味を感じる香ばしい匂いが周囲に広がる。店員さんは淹れ終わるとコーヒーマットを近づけてくれて、少し離れたテーブルに移って行った。

コーヒーカップを持ち上げ鼻に近づける。そのまま傾けすつと吸い飲んだ。ノートパソコンの画面には「正常に送信しました」と表示が出ている。これで今日やるべき仕事は済んだ。七瑠美は送信画面を閉じ、次にピクチャーのフォルダを開いた。そこには何十ものファイルが収まっていて一つ一つのファイルにタイトルをつけている。これは写真スタジオの時から自分の作品用に撮影したもので最初のころは地名や物名にしていたのだが、今は「場所の記憶」とか「季節のない街」のようにテーマをタイトルにしてファイルにまとめている。「場所の記憶」のファイルを開いてみた。そこに集められているのは建造物の作られていく過程を定点観測で写したもので逆建造物を取り壊されていく過程を同じように写したものでまとめている。こういう写真は五〇年一〇〇年後に意味を持つものだろうと思う。

店のカウンターの辺りから女性の怒ったような声がした。おそらく店主の娘さんであろうと予想した。怒りの対象は店主である父親のようだ。言葉の端々に「男尊女卑」だとか「前時代的」という単語が聞こえてくる。七瑠美のいるテーブルはカウンターの裏で別の部屋になっているため、客はいないものと勘違いして喧嘩を始めたのかもしれない。怒りのボルテージは上がる一方でさすがに居心地が悪くなってきた。そわそわと手元の物を触っていると視界の端に動くものを感じた。そういえば、もう一人同じ部屋で七瑠美と同じようにノートパソコンを使っている人がいたはずだった。そっちの方を見ると同じ歳くらいの若い男と目が合った。

同時に食器が割れる音と女性の叫び声が聞こえた。店主の声がある上に被さった。

「男はな、責任の重さが違うんじゃない」と。それは女に比べてという意味だろうと思った。

「父娘喧嘩ですかね」

七瑠美は所在なく、若い男に話しかけた。

「結婚して子どもを産むのが女の幸せだとお父さんが言って、娘さんは今の結婚は子どもひとり持つだけで精一杯で共働きが当たり前なのに、なぜそんなこと言うって、言ってましたよ」

何を言ってるのかと最初は戸惑ったが、若い男はカウンター側の壁を指し、接した席にいたので全部聞こえるとジェスチャーを交えて話した。

『男尊女卑』はどういう経緯で発せられた言葉なんですか？」

七瑠美は若い男に尋ねた。

「どんな男に貰ってもらうかで女の幸せが決まるって、ところでした」

若い男がすぐ答えてくれたので七瑠美は思わず吹き出してしまった。

「だから前時代的だったのか……。女は物と同じ扱い、要するに婚資ね。ヒツジやヤギを婿の家から嫁の家に贈られる国もあったからね……。あれって、今もアフリカでは続いているのかな」

今の日本で結納の儀式をしているところがあるのかも疑問だった。

「あれ、静かになった」

七瑠美が言うと、

「店主の奥さんが割って入って、本質を見抜くのは言葉じゃなくて行動で分かるものだった。お父さんは自分が食べるものが無くても、家族には十分食べさせてくれたよって」

それが責任の重さなのだろう。けれど、娘さんが言うように時代が変われば元に戻れない

のではないだろうかと思った。

「ところで、あなたもよくここで作業されてますよね。僕もノマドワーカーです」

若い男は立ち上がって七瑠美の前に来た。

「何をされてるんですか？ お仕事」

七瑠美は若い男に質問し、自分は写真家を目指していて、フリーランスのカメラマン新参者だと言った。

「僕はフリーランスのマーケティング職です。早い話が会社と会社の橋渡し屋のようなものですかね。写真家って商業カメラマンとは別ってことですか？」

若い男は七瑠美のノートパソコンを覗くように前屈みに頭をさげた。

七瑠美のノートパソコンはすでに電源を切っていた。

「そうですね。まだその域に到達できてませんけど。なので、ここで頼まれた仕事に手を入れて納品する作業をしている訳です。写真家……、アーティストって言ったほうが正しいのかもしれないです。絵画でも陶芸でも画家、陶芸家は芸術家でしょ。わたしも『げ・い・じゅ・つ・か』目指してコンクールやアート・イン・レジデンスに参加して……」

ここまで言いかけて、自分は何言ってるんだらうと急に恥ずかしくなった。初対面の人にまだ何の形もできていない夢のまた夢みたいなことを言ってしまったと。

「うん？ 参加して、どうなっていくのですか？」

若い男が話の続きを促した。

七瑠美には（どうなっていく）の分からないかった。沈黙が続く。すると、

「僕の生まれ故郷はK県の離島なんですけど、島の名前は亜玖祢島あぐねっていう。島の海岸線が絶景で写真を撮られる人なら絶対お薦めの場所なんですよ。切り立った崖が真っ白で平原の緑とのコントラストがこの世とは思えないくらい幻想的な風景なんです」

若い男が話を変えてくれた。

七瑠美は彼の気遣いに感謝した。忘れないようにスケジュール帳を開き、島の名前は平仮名で書いて後で調べようと思った。

「ありがとうございます。行ってみます」

若い男は「是非、是非」と微笑んだ。向かい合って彼の顔を間近で見ると緊張してきた。

七瑠美は顔も赤くなっていたと思う。それほど彼は魅力的だったのだ。

またしてもしばらくの沈黙が続いたときに、カウンターの方から笑い声がした。

「父娘さん、仲直りされたみたいですね」

若い男は笑顔をカウンター側の壁に向けて言った。

七瑠美はその顔を見てすぐに下を向いてしまった。彼を意識してしまって、これ以上ここにいるのは苦しいのだ。これが潮時とばかりに七瑠美は立ち上がってノートパソコンをリュックに仕舞い始めた。

若い男は七瑠美が帰ると察したのか、ポケットからカードケースを取り出し、カードを抜きだした。

「もし島のこと分からないことがあれば、いつでも連絡ください」

と言って名刺を差し出した。受け取ると、そこには明朝体で西森圭介と印刷されていて、

裏面を見るとメールアドレスとインスタグラムのアカウントのみ載っていた。七瑠美は自分の名刺を取り出した。そこには住所も電話番号も記載されているがこれしかないので仕方がないと思いつながら、

「島尾七瑠美といいます」

と言つて名刺を差し出した。

家に戻ると風呂場に直行した。冷房の効いた喫茶店から出て、三十分近く歩いたらTシャツが汗でびしょ濡れになった。梅雨が明けた七月半ばということもあり、午後五時を回っても外は昼間のようにまだ明るかった。

シャワーを顔に浴びせかけていると、今日一日の出来事がネガフィルムの一コマのように断続的に思い浮かんでくる。実際は店主父と娘の姿は目にしていないのに、あの時に想像した様子がもう記憶に取り込まれて再現されているのだ。

女は選んだ男によつて不幸が決まる。店主は七十歳を越えたくらいだろうか。団塊の世代かその少し後の世代なはず。男女平等が広がり始めたのが彼らの若いときだっただろう。自分の幸せが人によつて決められるという考えは納得できないなど、七瑠美は両手で顔を擦りながら思った。

ハイツの二階のワンルームでは昼間の熱気が籠っている。シャワーから出てサーキュレーターを回したがそれでは追いつかず、エアコンのスイッチを入れた。一分ほどすると冷えた空気が流れ出してきた。頭にバスタオルを巻いたまま、リュックからノートパソコンを取り出し電源を入れ、ローテーブルの下にあったコードを差しこんだ。ブラウザを開き、さつき喫茶店で聞いた離島の名前を調べるためにスケジュール帳をみた。「K県のおくね島」と書いておいたページに貰った名刺が挟んであった。「西森圭介」という印字を見ていると彼の顔が浮かんだ。どうしてあんなに意識したのだろうかと考えてみた。彼にすればいつものことかもしれないが、あんな好意的に接して来られると勘違いしてしまうからなのかもしれない。そんなこと決してある訳がないと名刺を裏返してノートに戻した。

検索しても亜玖祢島に関する情報は一日に二便の定期船のことくらいしかなかった。次にマップで亜玖祢島の場所を調べてみると外洋に面し、黒潮に囲まれた島というコメントが寄せられていた。行き方を検索すると、離島に渡る港まで夜行バスが出ている。これなら費用も安くで行けると離島行きが現実味を帯びてきた。

いま入っている仕事の予定を見てみる。九月末まで同期の男子が紹介してくれた音楽ライブ専門のカメラマンの助手として野外フェスの仕事がびっしりと入っている。離島に行くのは十月中旬になりそうだ。けれど三カ月あれば、撮影に行っている間の無収入を埋めるために仕事をするができる。最低でも二週間、出来れば一カ月は離島に滞在して撮り溜めておきたいと思った。

\*\*\*

早朝に港に着いたバスと亜玖祢島に渡る船は連絡しているらしく、八時に乗船が始まり八時半に出航した。一〇月中旬になつてもまだ半袖で過ごせる気温だ。

七瑠美は先日まで関わっていた野外フェスの余韻で気分は高揚していた。フェスの会場

は学生時代に体育祭で経験した縦割りチームの応援合戦のような熱い盛り上がりだった。もつとも音楽ライブ専門のカゲさんは有名なバンドや外国人バンドのコンサートを撮影しているため、野外フェスでもメインアーティストばかり担当したので、盛り上がりは当然といえば当然のことだった。

フェスの会場でカゲさんに離島撮影に行くと言ったら、大判カメラで撮ってはどうかと言われた。普段は一眼レフのデジタルカメラで仕事をしていて、それで離島撮影をするつもりだったので、その提案に驚いた。「そんな高額なデジタルカメラ買えませんよ」と言ったら、「馬鹿か、デジタルじゃなくてフィルムの大判カメラだよ」と言って笑われた。カゲさんも仕事とは別に写真展をする写真家でもあるので、そのときは大判カメラを使い、モノクロフィルムで撮影し、自分でフィルム現像とプリントをしているのだ。

七瑠美も芸大生のときに一応35mmのモノクロフィルムで撮影し、現像、プリントをした経験はあるがそれはあくまで経験のための授業であった。

カゲさんにレジデンスにエントリーしようと思っていることも話した。またしても、「写真家……、芸術家になりたい」と口走ってしまう。それまで笑っていたカゲさんが、「やりたいことをやるのはいい。でも、なりたいたいものになるのは自分の意思じゃなくて、第三者が決めることだよ。じゃなきゃ、『自称なんちゃら』って奴と同じだよ」と真顔で諭された。けれどそのあとは、また笑って大判カメラでの撮影の仕方を教えてくれた。

今、七瑠美の傍にカメラ用の大きなアルミニウム製キャリーケースがある。ケースのなかに大判カメラとフィルムホルダー一〇枚が収まっている。隣に立てかけてあるのはジッソの三脚とリンホフの雲台が入ったケースだ。これらすべてカゲさんが無償で貸してくれた。ただ七瑠美はカラー写真を撮りたかったので大判カメラのフィルムは自腹で買った。それも普通では手に入らないのでカゲさんの知り合いの写真家さんから分けてもらった。ハガキサイズのフィルム一ケース一〇枚で一万円だ。ホルダーに二〇枚入るので二ケース買った。

天候は快晴だが風が強く吹いていて、さつきから波立ちが大きくなってきた。船室は七瑠美をいれて十人ほどしかないなので、みな船尾のベンチに横になっていた。七瑠美もそれに倣って船尾に移動しベンチに横になった。そのおかげか約三時間ほど大揺れの中で船酔いすることがなかった。

船が亜玖称島の港に着いた。実はこの島の情報がなさすぎたため、宿の予約もせずに来たのだ。もし泊まるところがなければ、夕方の船で戻って宿を探すつもりだ。乗船客は全員島民のようで、着いた港に迎える島民が来ていた。最後に船を降りた七瑠美はそこに西森圭介の姿を見て思わず声を上げてしまった。

「どうしてここに？」

近づいてきた西森に対してうわずった声で訊いた。

「島民以外の乗船客がいると聞いて、もしかしたらと思って」

西森は七瑠美が乗船名簿にあるのを見て迎えに来たと言う。

「名刺いただいてから野外フェスの仕事があったりして、喫茶店で仕事することがなかった。それにわたし撮影旅行はいつも行き当たりばったりなので、今回も無計画なんです」七瑠美は島のことで何か分からなかったら連絡をというのも社交辞令だと受け取っていた。

「何日の予定で来られたんですか？」

西森はキャリーケースの持ち手に手の伸ばしながら訊いてきた。七瑠美が返事をする前にキャリーケースを引いて歩きだした。その後ろを追うように七瑠美が動いた。

「半月からひと月です。宿はまだ取れてないので、もし泊まる場所がなかったら夕方の船で戻ろうと思っただけです。」

すると西森は驚いたように立ち止まった。

「島に宿はないんですよ。今日帰ってしまうんですか？　こんな大荷物持って来られたのにな？」

七瑠美は慌てて、

「帰るんじゃないやなくて、向こうの港近くの宿を取って、毎日通おうかなと思っただけです。でも、宿がないのなら（通い）決定ですね」

だから観光情報がひとつもなかったのだと合点がいった。

「僕の家泊まりませんか？　ゲストルームがあるので遠慮なく。それにしても僕がここにいるときに来られてよかったです。僕がお薦めしておいて、何もお手伝いできなかつたら心苦しかったですよ」

西森はすでに七瑠美を泊まらせる段取りを組んでいたようで、すいすいと歩いて行く。ゲストルームというのはどんなものだろうと想像しながら、七瑠美は返事ができないままついて行った。港の周りにたくさん猫がいる。テレビで取り上げられる「猫島」に匹敵する数だ。犬もいる。最近ではリードを付けていない放し飼いの犬は都心では見られないが、離島では犬も地域猫と同じ扱いにされているのだろうか。

西森は駐車場に停めていたミニバンの後ろのドアを開けてキャリーケースを積み込んでいる。七瑠美が持っていた三脚ケースとバックパックもここに載せると手招きしている。今日、泊めてもらうのは確実なのだが、一応確認をしようかと、

「ほんとにいいんでしょうか？　ご迷惑おかけして申し訳ありません」と頭をさげた。

「何を改まっちゃって。いいに決まっていますよ」

バンつと後ろのドアを閉めた。助手席のドアをあけて七瑠美を座らせると、西森は運転席に回った。七瑠美はこれまで誰かにドアを開けてもらって車に乗ることなど、一度たりとなかった。西森の自然な振る舞いに感動した。シートベルトをセットして、改めて車内をみた。シートは本革なのか滑らかだ。車のことにまったく知識のない七瑠美にも高級なミニバンだと分かる。

十五分足らずで西森の家に到着した。家の場所はすぐに港から山に登る道に入り、しばらく行くと車道から坂を少し登ったところだった。港との距離は近いと感じたがこれを歩いていたら何分かかっただろう。車は屋根付きの車庫に停められた。

家の前に立つと目を見張った。玄関までの緩い傾斜のある前庭はゴルフ場並みの青々とした緑の芝生が敷かれ、飛び石が玄関前まで続いている。西森から来る道中に古民家をリノベーションした家だと聞いていたのだが、瓦も新しい入母屋平屋造りで玄関戸は古民家の格子戸と新たに透明アクリル板で取替えて家の内も見せている。いまだき、観光地でよく見かけるゲストハウスか料理屋の様相なのだ。三和土をあがると炊事場でリノベーション前は土間だったそうだ。窓を大きく取って陽光が入る構造になっている。ダイニングとリビングは

戸の仕切りはなくダイニングは杉の無垢板のフローリングでリビングはアカシアの無垢フローリングだと西森から聞いた。ダイニングの奥に同じく仕切りはなしに寝室がある。

七瑠美が泊まらせてもらうゲストルームに案内される。それはリビング横の廊下の突き当りにあった。他の部屋に比べれば広くはないが、大きな窓がついていて明るい部屋だった。床に荷物を並べて置いてからダイニングに戻った。西森は炊事場でコーヒーを淹れているところだった。

「素敵なお家ですね。ここは西森さんのご実家ですか？」  
家族が同居していると思えないものの一応訊いてみた。

「僕個人の島での家です。家族はこの島には住んでません。島を出て都心に住む島民は多いですからね。僕は中古の家や集合住宅を買い取って、リノベーションして貸したり売ったりするのが仕事のうちの一つです。会社の所在地をこの島にしていることもあって公的な仕事をこの島ではしています」

聞いただけでも西森はやり手の実業家だと分かる。彼の大らかさは余裕の表れに違いな  
いと思った。

コーヒーを飲んだばかりなのに眠気が襲ってきた。夜行バスでも十分寝たのだが緊張が解けたせいだろうか。

「すみません、部屋で少し休ませてもらっていいですか？」

西森はどうぞと笑って言った。七瑠美はゲストルームの中に入った。寝ているとき、玄関先で人の話し声が聞こえた気がしたがまた深い眠りに入ってしまった。

次に目が覚めたのはドアのノックする音だった。西森が呼びかけている。返事をする  
と、「食事の用意ができたので起きませんか」と言われた。慌てて枕元に置いていた携帯を取って時間を見ると十八時だった。お昼前にこの家に来て六時間以上も寝てしまった。

「はい、起きます」とだけ返事をして部屋の電気をつけた。

寝起きの顔と髪の毛はここではどうすることもできず、ゲストルームを出て洗面所に行こうとした。当然ながらダイニングには西森がいて目が合った。料理のいい匂いが部屋に充滿している。顔を見られないように俯きながら部屋を通った。

トイレはウォッシュレットが装備され自動で水が流れた。洗面台にはフェイスタオルとホテルのアメニティーにあるような歯ブラシセットが置いてあった。顔を洗い、歯を磨き、髪の毛を梳かしてダイニングに行った。

「もうほんとに重ね重ねすみません」

座卓を挟んで西森の前に正座をし、頭をさげた。

「さあ、食べましょう」

カセットコンロの上の土鍋がくつくつと湯気を出していた。それぞれの前には刺身の盛り合わせとてんぷらもある。

「歓迎の宴ということで仕出し屋に持ってきてもらったんだ。お酒、飲めるでしょう？」  
と言って徳利を持ち上げた。

土鍋の蓋を開けると何種類もの魚が見えた。七瑠美は偶然に再会しただけに、なぜこんなに良くしてくれるのか考えずにはいられなかった。普通なら自分に好意を持ってくれた人かなと思うのだが、そうは思えないのだ。

徳利が三本目になったところで、

「西森さんはどうしてこんなに優しくしてくれるのですか？」

と尋ねてしまった。西森は手に持った猪口の酒を飲み干して、

「そうだなあ、好きだからですね」

そう言って笑った。

「え、え、え」

七瑠美が慌てていると、

「人がね、人が好きなんです」

と付け足された。

食事が済むと片付けはさせてくださいと頼んで、七瑠美は食器を炊事場に運び洗った。水道から出てくる水はこの家の横にある井戸からモーターで汲み上げられているのだと隣に立って洗い終わった食器を布巾で拭いている西森が説明してくれた。炊事場だけでなく風呂の水もトイレの水もだそうだ。今、お風呂にお湯を溜めているから先に入れと言われるのを断り続け、西森、七瑠美の順に風呂に入って二十三時には部屋に戻った。

部屋に戻っても眠れるはずもなく、七瑠美は明日の撮影の準備をすることにした。喫茶店で西森が言っていた真つ白な断崖の場所を聞いておけばよかったと思ったが、船着き場から西森の家に来るまでの間にも撮りたいと思った場所はたくさんあつたし、とりあえず、明日は自分の一眼レフカメラで撮ろうと、バッテリーの充電を確認し、小さいリュックを取り出して広角レンズをカメラに付け、望遠レンズを交換用に入れた。メモリーカードやバッテリーの予備も入れた。

仕事を中断してアート・イン・レジデンスにエントリーする撮影のためにここまで来たが七瑠美にはアーティストになるための明確な進む道は分からないままだ。カゲさんに言われた言葉のニュアンスは分かるが到達するためのベクトルすら見えていない有様だ。同期の男子もカゲさんも今あるのは、どのような試練を乗り越えてきたのか。努力を積み重ねてきたのか、彼らの仕事ぶりを見てもそこに行きつく過程が分からない。

カゲさんが言う「やりたいことをやる」だけでは趣味で終わる。七瑠美は「第三者が写真家」だと認める要素たるものは何なのかを教えて欲しいのだ。写真の賞を獲れば誰も異論はないだろう。コンテストで入賞することも同じくだ。けれどそんな一握りの人しか選ばれないところを目指していつまでも落選しつづけていたら人生が終わるではないか。

七瑠美は堂々巡りばかりして一向に次の段階に上がれない自分に呆れるばかりだ。けれど自分が自分を見捨てたりしたら、それこそ何もかも終わってしまう。リュックのファスナーをきっちり閉めると、手の平を膺の下に載せた。そこが丹田というところでここに力を込めると健康と勇気が得られると、これも雑誌の取材で行った整体師の人が教えてくれたことだ。不安になったときに（おまじない）のようにこの行動をするとネガティブな気持ちが消える。

鳥の囀りで目を覚ました。窓の外はまだ薄暗かったが時計は六時を回っている。窓の傍に立つと遠くで海鳴りの音が聞こえた。寝る前に予定していた通り、早朝の撮影に出ることにした。部屋のドアをゆつくりと開き、リュックを持ったまま洗面所へ向かう。ダイニングの奥の寝室は木製の引き戸で閉じられていた。西森を起こさないためにもトイレと洗面を済



ますと静かに玄関の戸を開けて外に出た。

昨日通った道に戻ってみる。十分ほど歩くと岩場に降りる階段がみえた。チェックしていた場所のひとつなので降りて行った。ビルで言えば三階分ほど下に降りた形になる。水際すれすれにコンクリート造りの遊歩道がある。先に風穴の開いた岩壁があり、今まさに朝日が昇って来ていた。風穴の岩に近づくと遊歩道上に青白い沢蟹と思しき蟹がビーズのように一面に光っている。七瑠美は風穴の中に赤い太陽が収まり、青白い沢蟹が朝日を浴びて玉虫色に変化していくところを遊歩道脇の斜面に体を預けるように凭れかかってシャツターを切った。角度や場所を変え何十回も撮りまくと、次に沢蟹だけを画面いっぱい撮った。普通、沢蟹というと赤いのだが、なぜかこの沢蟹は青白かった。もつと近くで見ようとしゃがんで顔を近づけると避けるように遊歩道上にいた沢蟹は水面に半分沈んだ岩の間に逃げ込んで一匹もいなくなった。

風穴の開いた岩壁の上には樹木が茂っていて、今度は樹木の影が遊歩道を埋めつくしていった。赤かった朝日は昇るにつれて白く明るくなっていく。その過程は芝居の劇場の緞帳が静かに上がっていく様に似て、完全に幕が上がるとそこには演者たちと舞台装飾が姿を現すかのように空と海の境界に泡のような白い粒が波打っていた。

階段を昇って道路に戻ると次は赤い灯台のある場所に移動した。港からも見えたのだが、螺旋状に舗装された道路でさっきの風穴とは九十度反転した出っ張りのある崖の先にあった。階段ではなく直線のくだり坂になっていて、近づくと木造の灯台であった。赤く見えたのは屋根の部分で赤い瓦が載っていた。その下は百葉箱のような四角で四辺が斜めに広がって台形を作っている。灯台自体は壊れたりしておらず現役だと思うが、作られたのはかなり前だろうとペンキの塗りあとから感じられた。

この二カ所だけみても灯台や風穴の岩壁が観光の穴場になっていないことに違和感を覚える。昨日の港周辺の猫の多さも猫好きの七瑠美ならば、見逃すはずがなかったはずだ。まだチェックしていた場所はあったが時計をみると八時を過ぎており、西森に何も言わずに出てきたので戻ろうと思った。

帰りは登りになるので足が重い。灯台の場所から三〇分もかかって西森の家の下まで戻ってきた。見上げると芝生のところに島民とおぼしき人たちがたむろしている。下からでは西森の姿が見えないがきつとその中にいるのだろうと最後の坂を登っていくと、全員が七瑠美を振り返った。そこにいるのは男ばかりで七瑠美は挨拶しようとしたがその中でも一番年寄りの男が「どういうこった」と誰に向けるでもない言葉を発した。

「おはようございます」

七瑠美はそれでもみんなに向けて挨拶をした。西森は男たちの一番奥に立っていたが、何かあったのか、昨日の明るい彼ではないほど意気消沈していた。

さっきの年寄りが、

「あんた、写真を撮りにきんさつたやてな。圭介がそう言うてる。亜玖祢島のこと、外部のものには分らん決まりがあるんやて」

七瑠美はその表情から自分に対して憤慨しているのだと思った。けれど、西森から（決まり）が何なのかは聞かされていない。それどころか写真を撮りに来いと誘ったのは西森だ。けれど、そんなことを言えば西森がさらに詰められると思うと七瑠美は黙っているしかなかった。

「ここに来なされ」

年寄りがみんなを立ち退かせて七瑠美を芝生の中央へ立たせた。何が起きるのかと思つた矢先、目の前で火花が飛び散つたかのように熱い物が通り過ぎた。固く瞑つた目を開くと今度ははつきりと肩を叩かれた。年寄りの両手には火のついた巻き木とすりこぎ棒が持たれていた。

「やめろ、やめてくれ」

男ふたりに押さえつけられている西森が叫んだ。

七瑠美は別の男に押さえつけられ地面に座らされると、男たちが七瑠美を囲むように円陣を組んだ。めいめいがどこからかすりこぎ棒と巻き木を取り出し拍子木のような仕草で打ち叩き、念仏のような意味不明の言葉を唱えだした。腕を上にな下に前にと動かし円陣を回りだした。七瑠美を座らせた男がまた近づいてきて、七瑠美に正座をさせ手は合掌を組ませた。

年寄りに叩かれた肩の痛みよりも彼らの呪術のような行為が恐怖でパニックになる。目を固く瞑り俯いたまま震えていると、西森の腹の底から唸るような声が聞こえた。それでも目を開けることが出来ずにいると、バサバサと人が倒れる音がした。

念仏のような声が止まり、足早に地面を蹴る音がした。その間、誰も言葉を発することはなかった。背中を包むように抱えられた。そこでやっと目を開くことが出来た。西森が目を真っ赤にして七瑠美を抱きしめてくる。

「ごめんな……、ごめんな……」

西森は一度体を離してから、七瑠美の顔に手を当てて、それからまた強く抱きしめてきた。安心したことで七瑠美はやつと感情が出せた。「怖かった」と言つて西森の胸の中で大泣きしたのである。

西森は七瑠美を抱きしめたまま家の中に連れ戻した。

何か飲むかと訊かれたが、まだ外にあの男たちがいるのではと思うとそんな気持ちにはなれず、七瑠美は首を横に振った。

西森は七瑠美にまわしていた腕を離した。支えがなくなると床に倒れ込みそうになるのをなんとか耐えて、ゲストルームに入った。ベッドに横になったが放心状態で何も考えられなかった。ただ、とんでもない所に来てしまったという思いだけが心を占めた。

何時間が過ぎたのだろうか。眠っていたのかさえ分からない状態だったが、体を揺さぶられてうつすらと目を開けると西森の顔が見えた。

「これから島民会議が行われるんだ。君のことについて僕が質問を受ける。絶対に君を守るから不安だろうけどここで待って欲しい。軽い気持ちで島においでと誘つたわけじゃないから」

七瑠美はすぐに目を閉じ、何も返事をしなかった。しばらくの沈黙のあと、西森は出て行った。それが分かったのはゲストルームのドアが開き閉まる音がしたからである。次に玄関の引き戸が開いて閉まる音がした。カチャカチャと鍵を掛ける音、芝生の上を歩く音が続いた。

〈島民会議？ わたしのことで質問される？〉

七瑠美は西森の言っていたことを頭の中で復唱した。いったい自分のしたこと何があ

れほど責められるのか。それに西森は絶対に守るからと言ったが守れなかったときはどうなるのだ。ここで待つようにと出かけて行ったが、ひとりのうちにこの家から出て行く勇氣などない。家を出たとしても島からすぐに出ていけないからだ。もし、またあの年寄りたちに見つかりでもしたら、もっとひどい目にあうのではないかという恐怖しかない。それにさつき西森が最後に言った言葉が頭から離れない。〈軽い気持ちで島においてと誘ったわけじゃない〉は、その場しのぎの言葉なのか、でもこうして島に来た自分を家に泊めるなど世話をしてくれたことは西森の誠意からだとしか思えなかった。

夢をみていた。起きるとどんな夢だったのかまったく覚えていない。ただ、夢の中の自分は何の心配事もなく穏やかな気持ちだったことだけは確かだった。だから目が覚めた時、ここは自分の住んでいる家だと思った。目が暗闇に慣れてくると、まだここは島なのだと分かった。ベッドから落ちるように滑りおりて部屋を出た。リビングもダイニングも真つ暗で西森がいないことが分かった。トイレに行き、洗面台で顔を洗っていると家の外で車のエンジン音がした。玄関先まで降りていくと、昨日乗せてもらった西森の車が車庫に入っているところだった。七瑠美は慌ててダイニングの電気を付けようとしたがスイッチの場所が見つからず、そうしている間に西森が玄関の戸を開けた。暗闇の中にいる七瑠美を見て、少し驚いたように肩をあげた。

「おかえりなさい」

七瑠美は精一杯の気力を込めて言った。

「ただいま」と言つて靴を脱ぎ、真つ直ぐ座卓までくると上にあつたリモコンを取り上げてボタンを押した。すると玄関、ダイニング、リビングの電気が一斉に点いた。くると玄関入口の炊事場に戻ると冷蔵庫を開けてミネラルウォーターのペットボトルを取り出した。座卓にコップ二個を置き、ミネラルウォーターを注いだ。

「今日は本当にごめん。島民会議でどんな話だったかこれから話すね」

そういうと西森はコップを持ち上げ一気に飲み干した。それを見て七瑠美も喉の渇きを感じ、同じようにコップを持った。

「今日、家に来てた人たちは（亜玖祢島伝承保存会）って言う島の自治会の人たちなんだ。この島にあつた文化や芸能から農作、建築、製造にいたるまですべてのことを記録したものを保存して、継承していくのが主な仕事で、県の役所とは成り立ちが違うんだ。代々それを受け継ぐ家系の人がやつてる。その中で会長があのおじいさんなんだよ」

そこから西森の話は長く続いた。

あの人たちは亜玖祢島の情報を外に出すことを非常に嫌っている。そのきつかけとなつたのはある芸術家がこの島に来て作品を創つて発表したのはいいが、それを取材にきたマスコミ関係者が門外不出とされていたこの島の神事を隠れて撮影して出してしまったことで多くの島外の人が物見遊山でやってきて島を無茶苦茶にしたからだと説明された。

「だったら、最初からわたしが写真を撮りに来ちゃ駄目だったんじゃないですか」

誘われなければここには来なかったという意味で言った。

「僕はあのとときの君が必死で何かになろうとしているのを感じたんだ。父娘の喧嘩の前に君が撮つた写真が僕の席から見えてた。だから、この島の白い崖を撮らせたかった。島の間が介添えしていれば大丈夫だったからね。でも、僕が前もつて伝承の会の人に言つてなか

ったから……。昨日、君が来るって知って、だから迎えに行ったんだ。でも今朝のことまで気が回ってなくて……」

あんなことがあったのに、ただの行き違いだったような気がしてくる自分がいる。

「島民会議で君が撮った写真がマスコミや旅行情報誌などに行き渡らないことを確認したいということだった。アート・イン・レジデンスにエントリーするために来たことと、撮影場所は一切伏せるといふ確証が欲しいと。それまでは島から出せないことになったのだけど……」

写真を撮ってもいい、七瑠美は思いもしない回答にすかさずさかされてしまった。

「撮影はしてもいい。もうあんなことはない、ってことですか？」

まだ島を出たいという気持ちは無くなつてはいない。けれど、島民会議で島から出せないと言うのかと。

「僕がああ喫茶店で君を見てたのはいつからだと思う？」

島民会議とは関係のない質問をされた。

「いつから？」

そんなこと考えたこともなかった。

「僕は半年近く前から見てたよ。グルメ雑誌の取材に来たでしょ。その時あの店にいたし、君もそれからあの店で作業するようになった。カメラマンだということは、だから知ってた。あの日、君から写真家、芸術家になりたいって聞いて、さっき言った白い崖のことを話したんだ」

七瑠美はまた自分の軽薄なセリフをここで聞き、穴があつたら入りたいと思った。

そのとき、目の前に西森の顔が被さつてきた。西森の手が口が七瑠美の上をなぞっていく間にもう何も考えられなくなってしまった。

「本当に済まなかった」

西森は七瑠美を強く抱きしめながら言った。

七瑠美の体がそれに反応して熱くなる。頭の後ろが背筋に沿って小さな泡が流れ落ちる感覚に見舞われる。今朝の一件は衝撃を受けたし、すぐこの島から出たいと念じていたのだが、あれがなければ、今こうして西森に抱きしめられることはなかったと思う自分を「現金な奴」となじってしまった。それを誤魔化すように、

「怖かったです。それは今も……。ただ、なぜレジデンスに応募するために撮るのは許されるのですか？」

その理由さえ納得がいくものであれば、ここに残れるから訊いたのだ。

「この島を観光の島にしたいくないのがそもその理由だから、君が取材にきた人間でないということは会議でちゃんと説明して、みんなも分かってくれたと思う。僕との関係を訊かれたので、お互いが作業している喫茶店での出会いを僕が君を知ったところからの友人だちとちよつとだけ盛って話したんだ。そしたらあの爺さんが、『作品制作ができるまで島をでちやいかん』って言ったのが、さっき話した確証ができるまで島を出ちゃだめって形で決まってしまったんだよ。これは僕の推測ではあるんだけど、君がすごくショックを受けていたと言ったから爺さんは爺さんなりの詫びを込めて、満足いくまでここで撮影していけばいいって意味で言ったと思う」

そう聞くと七瑠美にとって好都合な気がするのだが、もうひとつの疑問を訊いてみた。「わたしをみんなが囲んで念仏じみた行動をされましたよね。あれの意味は何だったんですか？」

西森ははあっと、大きく息を吐いて、

「あれは、この島で伝承されている神事で（邪気払い）っていうやつなんだ。君が写真を撮りに行った風穴の岩壁のところにこの島を守護する神を祀る祠があるんだけど、あそこに入ったかもしれないと、君を見かけた島民が爺さんに報告したんだ。あの呪術みたいな儀式は君に憑いてきた悪い物を払い落とすためで、それをしないと島が災害にあうとされてるからなんだ。君には知ったこっちゃないよね。僕があらかじめ教えておかなかったのが悪かった」

七瑠美は沖縄の久高島にも撮影で行ったことがあったがあつたがあの島の中にもいくつかの禁足地があつたことを思い出した。知らなかったとはいえ、禁足地に足を踏み入れたことは悪かつたと思つた。

「君がここで撮つたものはレジデンスでもコンテストでも出していい代りに、ちゃんこの島の規則を理解して欲しいというのが会議の結論なんだ。あと、撮影場所は公表しないことも条件だけど」

最後通告のように西森は言い終えた。

「知らなかったこととは言え、わたしの思慮不足でご迷惑をおかけしたと思います。撮影をしてもいいと言ってもらつて有難いです。わたしの方こそ滞在させてもらえて嬉しいです」西森はほつとしたようにもう一度七瑠美を優しく抱きしめた。

朝がきて、七瑠美はゲストルームではなく西森の寝室のベッドで目覚めた。横に小さな寝息をたてた西森がいる。布団の中のふたりは何も身につけていなかった。あれからお互いの生年月日を教え合い、同じ歳であることが分かつた。

「おはよう七瑠美」

西森は布団の中で腕を絡めてきた。

「びっくりしたー」

それは起きていたこともだが、「七瑠美」と名前と呼ばれたことの方が驚きだった。

「圭介さん」

七瑠美も同じように名前と呼んでみた。

「なんだい、七瑠美」

圭介はおどけた様子で返事を返した。

七瑠美は急速な距離の詰め方に戸惑いはあるが、それ以上にずっと以前からこういう関係だったような、しっくりくる感覚に囚われていて、どういう態度をすればいいのかわからないのが本音だった。

何も答えずにいると、圭介は布団をさつとめくりあげ、ベッドから立ち上がった。そのまますたすたと洗面所に向かっていった。七瑠美は圭介の裸の後姿をちよつとだけ見て目を逸らした。それから自分も立ち上がって、服の散らばっているダイニングに行き、自分の服を拾ってゲストルームへ入った。服を着て十分ほど時間が経つのを待つてからゲストルームを出た。圭介もすでに服を着て、炊事場でお湯を沸かしてコーヒーをたてる準備をしてい

た。

洗面所に入る七瑠美に向かって、

「今日は朝から役所で仕事をしてくるから、七瑠美は撮影に行っておいで」と右手でシャツターを押すふりをした。

好ましい男と一緒にいて、好きな事ができる。これは夢の中なんじゃないかと、昨日の事など忘れ去ったように、洗面台の前で笑顔の七瑠美はこっそり自分の頬を抓ってみた。

夢見心地のまま、圭介が用意してくれたコーヒーとトーストの朝食を食べた。圭介から役所に島内の地図があるから一緒に行かないかと誘われた。これから単独で島の中を撮影するには地図は必要不可欠だ。七瑠美は「はい」と大きく頷いた。

車で坂道を下り二股道に突き当たった。左が港に続く道なのは初日に通ってきたので覚えていた。もう一本の方は圭介の家とは逆方向から山を登る道のような道だ。ウインカーのカチカチという音が右に曲がり終えると鳴り止んだ。すぐにまた道が分かれ、今度は海側の下にくだる道に入っていく。ほどなくコンクリート造りの三階建て建物の前で停まった。すでにそこが駐車場のようで、すぐ目の前は湾になっていて小さな波止がある。道はここで終わっていてプライベートビーチさながら景色を独占していた。

興奮気味にあたりを見回していると圭介に呼ばれた。玄関までの階段を登ったところで待っている圭介に追いついた。すると、そこには昨日の年寄りたちがいた。七瑠美は彼らを見た瞬間に体が固まって動けなくなった。圭介が傍にきて七瑠美の手を握った。

「驚かせたね。でももう心配はいらないよ。もう一度会っておかないと、今後、島のどこかで会ったときにお互い困るだろうって三喜助さんが言ったんだ」

圭介は七瑠美に向かってそう言い、年寄りの方に向かって頷いた。

年寄りは一歩前に出て、

「伝承会の会長をやつとります立尾三喜助えいいます。昨日は怖い目え合わしてもうおて、すまんことしやした。このとおり……」

七瑠美に向かい深々と頭を下げた。昨日と同じ人物とは思えないくらい温厚そうな人に見える。といつても昨日は誰の顔もまともには見られず、違いを感じるのは雰囲気の方だろうが、三喜助に至ってはその横顔が教科書で見た正岡子規の写真とそっくりで思わず笑みをこぼしそうになった。

「わたしこそ、禁足地と知らず入ってしまったて申し訳ありませんでした。それにこれから撮影をしてみわってもいいと圭介さんから聞きました。それで地図をいただきにきたんです。もし他に禁足地がありましたら教えてもらっていいですか？」

地図に禁足地を印しておけばいいと思ひ尋ねた。

「禁足地はあそこだけやね。あとは森林の奥へは行かんしてほしい。道い、迷いようからな」「それから」と、三喜助は駐車場の端に停めてある白い電動自転車を指さした。「あれを貸してやる」

本当に昨日とは大違いの扱いに七瑠美は徐々に警戒心をとかしていくことができた。喜んで頷く七瑠美を見て、圭介が安心した顔をしていた。

「地図もこの中にある伝承の会の事務室に置いてあるから中に入ろう」

圭介が七瑠美の手を取って歩きだすと、周りからひやかす声があがった。

事務室は思ったより広く部屋の周囲は博物館の展示ケースと同じガラスの什器で埋め尽くされ、部屋の半分は書架が図書室のように並んでいる。巫玖称島は渡来人から押しつけられる形で島に移り住んだ先住部族が祖先なのだと言明を受け、遺跡の写真や発掘された生活道具などを見せてもらった。その生活様式を後世に残しておくことが温故知新というしており、子孫へ良い未来を開くことができるというのが伝承の会の存在意義なのだそうだ。島民会議から戻った圭介から言われた（島の規則を理解すること）も滞在の条件だったことを七瑠美は改めて認識した。

島内の地図を三喜助から渡された。それは手書きの地図をコピーしたA4サイズ用の用紙だった。それを見て、圭介に教えられた真つ白い崖と緑の平原のことを思い出した。そのために来たのに忘れていた自分に半ば呆れる七瑠美は、

「白い崖があるのは、この地図のどこですか？」

三喜助に尋ねてみた。

「それはここやさ」

三喜助が指さしたのは亜熱帯植物園と書かれた森林地帯を越した港と真反対だった。さきほど森林の奥深くは行かないでほしいと言われたところではないのかと不安がよぎった。「さつき言いよった森林にひとり入るんは危ないけ、今度、伝承の会で行くとき誘っちゃる」

三喜助が言う。圭介がよかったねと七瑠美の頭を撫でると、またみんなにからかわれた。声が静まると、仕事に入るので撮影に行っておいでと告げられる。三喜助がそれに続けて、電動自転車は家に乗って帰っていいと言った。

自転車のキーをもらい役所を出た。カメラバッグを前かごに入れて走りだした。自転車は高校生のおきを最後に最近まで乗っていなかった。電動自転車に乗るのもこれが初めてだった。最初の登り坂は役所から車道にでるまでで、右手のハンドルのレバーを回すと軽々と登っていく。雲のない青い空に深い木の緑が重なる。海風がさわさわと髪を流していく。七瑠美はいま、この島に自分は歓迎されたのだと喜びを噛みしめた。

来るときに通った二股道を港方面に曲がる。船を降りた時にいた猫たちの写真を撮りたかったのだ。船着き場に着くと三匹の猫がベンチや通路の付近にいた。自転車を止めカメラのストラップを首にかけ近寄って行った。白黒のハチワレと茶トラは成猫でどっしりと横になっているが白茶の仔猫はその間を飛び跳ねるように移動している。地面に寝そべるように肘を立てて猫と後ろの海と空と小型漁船を入れ込んだ構図を撮る。潮で洗い流されたコンクリートのごつごつ感と磯の匂いが非日常に拍車をかけてくれる。仔猫が身を低くして七瑠美に近づいてカメラを覗き込んだ。魚眼レンズで撮ったみたいな顔がモニターに出されてひとり笑いをしていた。

笑ったままの顔で立ち上がると船着き場のすぐ前にある食堂のおばさんがこちらを見ているのに気づいた。店前を箒で掃除しているようだ。七瑠美は慌てて顔を整えてお辞儀をした。

「あなたは圭介さんとこの？」

箒を持ったままこちらにやって来た。もう知られているのかと驚いたが、

「そうです。こんにちは」

嫌厭されまいとちゃんと挨拶をした。

「写真撮りよるんやてね。ここは外洋に面しとるけね、夕日が海ん中に沈みよんのがみえるよ。その場所は……、地図もつちようか？」

七瑠美はポケットから地図を出しておばさんに渡した。港から少し離れた海岸に指を置いて教えてくれた。おばさんと立ち話をしている間に猫たちが数匹集まってきた。すると何も言わず開店前の店の中に入っけいき、取っ手のとれたアルミ製の両手鍋をさげて戻ってきた。

「さあこっち来んね」

七瑠美は自分に言われたと思ひ踵を返したが、それより早く猫たちがおばさんの後を追っていた。船着き場そばの公園、といつても更地を囲むように低い木が植えられた場所の入口に鍋をどんと放り置いた。猫たちはそこから小さな魚を啜っては散らばり食事を始めた。空になった鍋を持って戻ってきたおばさんに札を言っけ別の場所に行こうとしたら、

「これ持っけ行きんさい」

腰エプロンに吊るしていた袋を渡してきた。中にはラップに包まれたおにぎりが二つ入っていた。

おばさんの親切に泣きそうになる自分がいた。自転車漕ぎながら、七瑠美はこれまでランドスケープと言われる日常生活にみられる風景や建築物ばかり撮っけいて、風景に写り込んだ人以外は人の写真は撮っけ来なかつたなと思っけた。理由は訪れた土地を感じるのには人ではなく、時間の経過が現れっけている建物や看板などだつたからだ。けれど、この島では景色よりも人のことが気になりだしてっけいる。それは自分自身が旅人ではなく、違っけ形でここに留まっけっけいると思えるからかもしれない。

おばさんに教えてもらつた海岸に着いた。道路脇に雑木林の間に細い道があり少し進むと砂地に変わつた。自転車ではタイヤが沈み込んで進めなかつたため、そこに置っけいて歩いて行く。海岸に出る手前に大きな巻貝が落ちていた。七瑠美が近寄ると巻貝から蟹のような脚が飛び出して動き出した。ヤドカリか、と屈んでカメラを向ける。ヤドカリはゆっけくりと岩の間に入っけて隠れてしまつた。

さらに歩き、細い道を通り抜けて浜に出た。白い砂浜に草の生えた岩が点々とある。海岸の幅はそれほど広くはなく、平行に波打ち際に繋がっけっけているため砂浜の真ん中あたりで横になると視線が海と空の境界線と同じ高さになつた。おばさんが言っけっけいた海に太陽が沈む絶景はここに間違っけない。

時間は正午を回つたところだつた。起きあがっけっけカメラバッグからお茶のペットボトルを取り出し、貰つたおにぎりを食べ始めた。海苔も具も入っけっけいない塩にぎりだが炊いたばかりのご飯の温もりが残っけっけいてとても美味しい。ふたつのおにぎりをあつてっけっけまに平らげた。

食べ終わり、また横になつた。目を瞑ると瞼を通して赤い光が目の中に広がる。波の音が呼吸と共鳴する。人間の始まりは海からだとかで読んだことがあつたが、ここにっけると自分の祖先がほんとうに海の生き物のように思える。七瑠美ははたと、いい考えが思っけっけいた。それはこの島での撮影のテーマを海と人の成り立ちにっけっけすることだつた。写真では作者の思っけを観る人にどう伝えるかが肝となる。キャプションやステートメントで意図を表明する方法はある。それはあくまでも補助であつて、写真をどう鑑賞してもらっけのかは被写体を撮つたときにすでに決定づけられてっけいる。まずは七瑠美がそこに焦点をおっけいて撮影するこ



から始めればいいのだ。

確か予備で持ってきていたコンパクトデジカメが防水仕様だったと、カメラバッグに手を突っ込む。大判カメラを貸してくれたカゲさんが島に行くなら海にも入るだろうと持たせてくれたのだ。その時はさして有難がりもしなかったが、なんと感謝すればいいかわからない。浜で地図をみたり、コンパクトカメラの試し撮りなどをしているうちに太陽が傾いてきたが、日没時間にはまだ間があったし、海に入る準備もして来なかったのぢやんとした撮影は明日することにした。

家に戻ると圭介がいた。食事の準備を始めていて七瑠美も荷物を置くと隣に立って、何か手伝うと言った。どこで買っ物をしたのか炊事場には買っ物袋が置かれている。

七瑠美は圭介に頼まれた大根を卸しながら、今日あった食堂のおばさんのことや撮影のテーマが見つかったことなど興奮気味に話した。圭介は二〇センチくらいの青魚の頭を切り落とし、背に包丁を入れて上手に三枚におろしながら、ここにこして話を聞いてくれた。

七瑠美のすることがなくなると、料理が仕上がるまで時間があるから先に風呂にはいっておいでと言われた。この家に来て初めて浴槽にお湯を溜めて入った。お湯の中で屈折して見える自分の腕や足をゆっくりと撫でさする。圭介に触れられた感覚が蘇ってきた。これまで七瑠美が付き合ったのは一度きりだった。大学生になるまで彼氏がいないことを女友だちに言ったら、そんなのではダメだと担ぎ上げられ、七瑠美のことを好きだと言っている男子がいるから付き合えと半ば無理やり付き合わされた。相手のことを好きでも嫌いでもないまま、写真制作にほとんどの時間を費やすようになると自然消滅した。圭介に対してはどうなのだろうと考えた。あの一件を含めここでの生活が非日常だから気分を高ぶらせているのは間違いない。自分は圭介を好きになったのだろうか。お湯を両手で掬い上げ、顔に浴びせた。

風呂からあがると、ダイニングの座卓に圭介が捌いた魚の刺身が置かれていた。七瑠美のすった大根おろしはトンカツの薬味として上にかかっている。圭介が炊事場から土鍋をはこんできた。鍋敷きの上に土鍋を置くと鍋掴みを持った手で蓋を取った。玉手箱のように白い湯気がたちのぼり、少しすると瑞々しく輝く白米が見えた。

「すごいー、土鍋でご飯を炊くんですね。圭介さん、お魚は捌けるし、料理人になれますね」  
圭介はまんざらでもないという顔で首を横に振った。

「ご飯をよそうと夕食が始まった。」

「すごく美味しいー。このお刺身はなんですか？」

七瑠美はひと口食べてから訊いた。

「ごま鯖だよ。取れたてだから酔じめにできなかった」

その返事に七瑠美は、

「鯖のお刺身、生まれて初めて食べたかもしれない」

箸を持ち上げてはしゃいだ。すると、圭介が中腰になり七瑠美の顔に手を伸ばしてきた。口の端についていた米を摘まむとそのまま自分の口に入れる。

「行儀悪くてすみません」

七瑠美は自分でも口のまわりを触って何も付いてないか確かめた。

「いや、嬉しいよ。料理は人のために作るものだからね、僕としては。でもね、明日からしばらく向こうに帰らなくちゃいけなくなつたんだ。七瑠美が自炊するんだよ、いいね」

向こうとは都心のことだろうと思つた。

「食材や日用品は毎日、夕方に船着き場のところにある倉庫で市が出るから、そこで買ってきて。お金は月末に僕の口座から引き落とされるからお金のことは気にしなくていい」

さっきの買い物袋はそこで買ったものなのかと合点がいった。なにせ、島の中にスーパーどころか売店も見当たらない。魚は漁に出て、野菜は畑で賄つているのだと思つたが他の物はどうしているのだろうかと疑問に思つていた。

「わたしがここに残ること、三喜助さんたちはご存じなんですか？」

どうしても気になつてしまふので尋ねた。

「知つてるけど、もう何も気にしなくていいんだよ。僕が仕事で島を出るつて三喜助じいさんに言つたら、七瑠美のことは心配するなつて。森林の案内もそのうちするつて言つてた」  
森林に行ける。それは胸が高鳴ることだった。カゲさんから貸して貰つた大判カメラの一番である。

今夜も圭介は誘つてきた。手を引かれ圭介の寝室に連れていかれた。お風呂の中で考えていたことは何の弊害にもならなかつた。圭介が目の前にいると頭ではなく心のまま行動してしまう。これを恋愛というのだろうか。経験値のない七瑠美には判断しかねることだった。ただ、自分の気持ちに正直に生きることが正しいことならば、間違いではないと言える。

七瑠美は圭介の腕枕で体を横たえていた。お互い話はしなかつたが、息遣いで起きていることは分かつた。先に口を開いたのは圭介だった。

「この島は七瑠美にはどう見えてる？ 写真の題材という意味ではなくて」

これは好きか嫌いかを問われているのかも知れないと思つた。返事は慎重にしなくてはならない。

「正直、まだこの島がどのような成り立ちをしているか分からない。自分が生活している都心では、隣に住んでいる人のことをまったく知らなくても不都合はないけど、ここではコミュニティが大切なのだということは感じます。それはここだけの話ではないでしょうけど」  
当たり障りのない返事をした。圭介は天井を見上げたまま「そうだねー」と語尾を引き延ばして言った。

圭介が家を空けてから七瑠美は本来の自分を取り戻した気分になつた。なんとしてもここでの写真制作でこれまでにない世界を創りだしたかつた。圭介には直接言えなかつたが、この島のことをどこか「未開の島」だと感じていた。古くから伝わる儀式を継承しつづける排他的な思想を持つ島民たち。だが、この島を知っていくにつれ都心がこの島より優れているのだろうかと考えるようになった。その気持ち海と人の成り立ちをテーマにする動機とどつた。イメージとしてはレンズでしか構築されない光と影をモチーフにすることだった。

太陽の沈む浜に防水カメラと水に入っても大丈夫な格好をして、昨日と同じところに電動自転車を停めて細い道を歩いた。浜に着くと中学生くらいの女の子が数人ビーチバレーのようなボール遊びをしていた。島に来て、自分より若い子を見たのは初めてなので、彼女たちも島外の子なのではないかと話しかけることにした。

「こんにちはー。みんなはこの島の人ですかー？」

少し離れたところからの声かけだったため、声をはりあげた。

彼女たちは手を止め、互いの顔を見合わせて可愛い鈴みたいな声で笑い出した。七瑠美の存在には気づいているのに何も返事をしてくれない。嫌がっているふうでもなさそうなので思い切つて、近寄つてみようと思ふ足踏み出した。すると、彼女たちは「きゃあー」という悲鳴じみた声をあげて海に入っていくではないか。浜にボールを置き去りにしたままで。

さっきまで高いところにあつたはずの太陽が赤い光を発して海面に落ちつつある。七瑠美は彼女たちを追つて海に入つて行つた。ここは遠浅のよう歩いていくから歩いても膝くらいまでしか浸からない。先に海に入つた彼女たちは横一列に並んで海に浮かんでいる。人数を数えてみたら七人いた。やつと海水が七瑠美の腰のあたりまで来た時、夕日が海に沈み始めた。カメラと一緒に海に潜つてみた。揺ら揺らと景色をぼかす海の中に浮かぶ彼女たちの姿と西の方から差し込む真つ赤な光がカメラのレンズを通して七瑠美の目の中に入り込んできた。

何分？ 何十分？ 彼女たちと海の共演を撮つただらう。足元の海底は岩で覆われており、そこにいる透明に近い海老や群れで泳ぐ魚も撮り続けた。気づけば太陽は完全に海に沈み、彼女たちの姿はどこにもなかった。浜にあがると、さっきあつたボールもない。また笑い声が聞こえた。それは道路にでる細い道からだったが、姿は見えなかった。

急いで道に戻つたが結局会えなかった。それでも海の写真を人と交えて撮れたことは大収穫だった。すぐに家に戻りハードディスクに写真を保存しようと電動自転車に跨つた。

家に着くと玄関に買い物袋が置かれていた。中を見ると食材や飲料が一人分入つていた。誰かが届けてくれたに違いないが一体誰が、と思った。ずぶ濡れの服を三和土で脱ぎ風呂場に直行した。熱いシャワーが潮を洗い落していく。

シャワーを済ませ頭にバスタオルを巻いたまま、パソコンの電源をつける。画面に映しだされる海の姿は赤く燃えさかる炎のようで七瑠美の想像をはるかに超えている。海の中にいる彼女たちは逆光でシルエットになつていた。いわゆる肖像権にも問題はなさそうだ。それにしても彼女たちに避けられたのはショックではある。自分が島外の人間なのが理由としか思えないのだが、これも島に伝わる不文律なのだろうか。

データ保存が無事終わると、急に空腹感がやつてきた。そこで誰かが置いていってくれた買い物袋を覗いてみる。総菜の魚やペットボトルのお茶、クッキーの箱が入っていた。袋から取り出していくと、底の方にメモ書きが入っていた。それは三喜助から明日の朝、伝承の会のメンバーが亜熱帯植物園に修繕の仕事ができたので、約束通り連れて行ってあげるので八時ごろに車で迎えにやるので、そのつもりで準備をしておくようにと書かれていた。

七瑠美はお礼を伝えたかったが、三喜助の電話番号もメールも何も知らなかった。圭介にメールをして尋ねてもいいと思つたがやめておいた。

朝、玄関戸を叩く音がした。時間はまだ八時にはなつていない。急いで玄関まで行つた。そこにいたのは三喜助ではなかったが見覚えのある人だった。歳は五〇代くらいの男性で伝承会の事務室でも三喜助の傍にいた。「おはようございます」と七瑠美が言うと、「……あす」と小さな声で返してきた。名前を訊こうと言いかけたら、さつと車に戻つてしまったので、七瑠美は慌てて、カメラバッグを取りに部屋にもどり、車のところまで走つて行つた。

車は軽トラックで荷台には作業道具が積まれていた。自分で助手席のドアを開けて乗りこんだ。すぐに車道に出ると山の上に向けて走り出した。十五分くらいで亜熱帯植物園と立札が立った森林の入口まで来た。車の中でなんとか喋りかけようとしたが、軽トラックがミッシェンのせいか、男性のギアチェンジをする手とクラッチを踏む足が常に貧乏ゆすりのように震えていて、どうにも話しかけられなかった。彼は車を車道に停めると何も言わず降りて行った。戻ってくるのかと待っていたがどんだん先に歩いて行くので七瑠美も車を降り後ろを追って走った。

森林の中は遊歩道になっているが下草が生い茂り地面が途切れる個所もあった。七瑠美が後ろにいるのを知ってか知らずか、男性は歩きながらデイゴ、ビロウ、ソテツとつぎつぎ樹木の名前をあげていった。数分ほど歩くとそこはもうジャングルの中のようなだった。といっても七瑠美が知っているのは沖縄北部の「やんばるの森」くらいだが、ここも生い茂った樹木が空間を包み込み、地面は黒ずみあたりは薄暗い。シダの化け物かと思うような大きな植物があるのも同じだ。奥深くまで三十分ほど歩いたと思う。男性はここからは迷うことがないのでひとりで行けと言った。七瑠美が帰りはどうしたらいいかと訊くと、来た道にこれから目印を付け直しに行くから、それを辿れば大丈夫だと二〇センチほどの頭の部分に赤い塗料が塗られた木の杭を見せてくれた。目印を付けるのが今日の仕事だったのかと納得して男性と別れた。

ひとりで歩き出してからの遊歩道は、小高い丘状の登り坂になっていて、道に丸太を埋め込んでいるため歩く道に迷うことがなかった。さらに三〇分が経ったころ丘を登りきった。目の前には盆地状の平地が開けていて、そこに集落があった。降りていくと中央に「司の家」と札のかかった大きな木造りの建物があり、周囲に二〇軒ほどの小屋が囲む形で建っている。近づくると赤ん坊の泣き声がどこの家からも聞こえてくる。このような奥地に人が住んでいるとはと、七瑠美は辺りを見て回った。小屋の外周には生活臭がない。三喜助は他には禁足地はないと言っていたが、ここは島外の人間が踏み入ってもいいところなのだろうか。七瑠美は小屋から誰かが出てくるのを待って会うべきか、いまずぐにここから立ち去ったほうがいいのか判断がつかなかった。

一旦落ち着こうと、カメラバッグの中のペットボトルを取り出した。そのとき昨日もらった地図が出てきた。そうだ、これに何て書いてあるのか確認すればいいのだと、まずペットボトルの水を半分近くまで飲んでから地図を広げた。

亜熱帯植物園のところを見ると、真ん中に「環状集落」と小さな文字で書いてあった。つまりここが「環状集落」ということかと、立ち並ぶ小屋を見渡した。いずれにせよ、三喜助にこのことを訊いてから撮影したほうが無難な気がしたので、ひとまず今日は森林の中の撮影だけにしようと坂の入口の方へ戻った。そこからもう一度「環状集落」を見渡した。やはり誰の姿も見えなかった。

今日は「白い崖」の下見ができると思っていたのだが、地図で見ると「環状集落」の向こう側にある森林を抜けきれなければ白い崖は現れない。それに「環状集落」が何なのか気になってしかたがない。これまでの旅撮影とは何かが違うと感じていたのは、この島のことをもっと知りたいと思うことだろうか。

小高い丘を登って降りるとフラットな遊歩道まで戻ってきた。男性が言っていたように赤い杭が等間隔に刺してあり、遊歩道を目隠ししていた下草がきれいに刈り取られていた。

亜熱帯植物園の立札がある車道まで戻ってきた。男性の車はもうそこにはなかった。七瑠美は「環状集落」のことを三喜助に訊くため「伝承会」の事務所のある役所に行こうと地図を見た。車道脇をガードレールに沿って歩いて行くと、眼下に役所のある小さな湾が見えてきた。その間、車やバイクとすれ違うこともなかった。この島にはどれくらいの人に住んでいて、何を生業にしているのだろうかと思っただ。島民会議で七瑠美に対して「この島の規則を理解して欲しい」と圭介から言われたけれど、今朝の男性にせよ、海で出会った少女たちにしても避けられている感が否めない。こんな状況で「島の規則」をどうやってたら知ることが出来るのだろうか。

最後の坂を下り役所の玄関に着いた。七瑠美は息が上がっていたのですぐに中に入らずに玄関まわりをゆっくり歩きながら息を整えていた。駐車スペースに今朝乗せてもらった軽トラックが停まっているのを確認して、役所の中へ入った。

職員の人と目が合った。「『伝承会』の事務所に行きたいのですが構いませんか？」と尋ねると、職員の人は「いきやあせ、いきやあせ」と促してくれた。この人も（邪気払い）の時にいた人だった。

事務所のドアをノックする。古い木製のドアはどこを叩いても音が響かなかった。誰も出てきてくれないのでドアノブを回した。事務所の電気は点いているが誰もいない。事務机の上クリップボードが置かれていて、展示ブース・書籍閲覧はご自由にと書かれた用紙が挟んであった。七瑠美は展示ブースへ行った。

地図をもらいにきた時は展示も書籍もちゃんと見ていなかった。今日はまず「環状集落」の資料を探す目的があるので見逃すまいと慎重に見て行った。展示ブースに縄文・弥生時代の土器片や民具、平安時代末期から鎌倉・室町時代の円鏡が発掘されていた。七瑠美はこんな小さな離島なのに本土と同じような文化が伝わっていることに驚いた。次に書架の方に行ってみる。「『亜玖称島史』と手書きされた広辞苑のような厚みの本があった。それを抜き出し閲覧用の席に座って開いてみる。「環状集落」を記したところははないか目次に目を通す。それ自体はなかったのだが「親族の基本構造」という章を開くとそこに「環状集落」という言葉が出てきた。つまりこの島はひとつの一族から構成されたことが始まりなのだ。さつき見た「環状集落」は遺跡などではなく人の気配があったことは謎のまま残った。

家に戻るとそこに圭介がいた。そして大事な話があるからこっちに来ると、ダイニングに来るよう手招いた。いつもの柔和な顔ではなく真顔なのが七瑠美を緊張させる。

座卓の前に正座した。しかし圭介は話し出さないでいる。まだ島には秘密があるのだと確認した。七瑠美待っていることに耐えられず、

「圭介さん、わたしまたやっちゃ駄目なことしましたか？」と訊いた。

それでも圭介はしばらく黙っていた。やがて表情はすこし緩み、かすかな笑みを浮かべたので違ったのだと、七瑠美はほっとした。が、すぐまた別の不安がよぎった。圭介の表情は悲しげに見えてきたからだ。

「今日、環状集落に行ってきたよね」

圭介が知っているということは、これもまた三喜助たちと情報交換したからだと分かった。七瑠美は頷くも、言葉を発しはしなかった。

「亜玖称島には過疎を防ぐための婚姻制度が昔から残っていてね、島で生まれた男は島に

残り、女は島から出る。女が島外で結婚し産んだ（女の子）の子どもは島の男と結婚し、島に戻る。その相手は生まれたときから決まっている」

今日見たのは島で生まれた子どもたちがいる家だという。環状集落は言わば島での出産育児の場なのだ。

「僕は島外で生まれた男なので、島外の女性と一緒になって子どもを作る。島内と島外の交叉結婚制度って言って、この制度は今もずっと続いているんだ」  
〈だから何？〉

七瑠美は自分の行動で問題になっていることが何だったのか、まったく分からなかった。僕と一緒に子どもを作ってくれませんか？」

唐突に言い、圭介は座卓に手を置いて頭を下げた。

「えっ」

さすがにこれは冗談だろうと思って、大袈裟にのけぞった。

「圭介さん、冗談にもほどがありますよ」

すぐに反応がなかったのでトーンを落として言った。

「七瑠美はそりやびつくりするだろうね。でも僕はそうじゃない。君が雑誌の取材であの喫茶店に来たときから、ずっと見ていたんだよ。君が写真家、アーティストになりたいと願っていることも聞く前から知っていた。どうしたら、頭ひとつ抜きん出られるのかをいつも悩んでいたでしょ」

七瑠美は途中まで、何回同じことを言うのかと少し落胆しかけていた。それが最後に七瑠美の深意を見抜かれていたことに色を失った。

「そんな深刻な顔しないでよ。悪いって言うてる訳じゃない。小説家だって画家だって、みんな競争を打ち勝っていかなくちゃ、今の社会では職業として成立しない。でもね、僕は君に純粹にアートだけを制作できる道もあることを伝えたかったんだ」

純粹にとは、お金に換算する必要がないということか。圭介の話の続きを待った。

「この島の人間になれば、ただ自分の感性に従って作品を創れる。誰と競うこともない。君が経験したことがないことがこの島にはある」

圭介は七瑠美の手を取って言った。

「分からないです。圭介さんが一緒に子どもを作ろうと言った理由が。まず結婚じゃないですか。それにわたしが写真家になれないことは関係ないじゃないですか。島の人間になること、どうして経験したことのない体験ができるのかも」

写真のことを言われたせいで気持ちがささくれてしまった。

「そうだったね。君は写真となると真摯に向き合うところがあるから、僕がこの島の〈白い崖〉のことを話したときの君の表情ときたら、夢見心地だったよ。僕が勘違いしてたのは、これをきっかけにして親しくなろうと思ってたことだ。でも、君は僕に連絡はくれなかった。この島は島関係者と一緒じゃないと港周辺くらいしか撮影できないからね。ずっと船の予約名簿に君の名前がないかチェックした。僕は島民と来島者のどちらも管理する立場にあるから問題なく君がここに来る日が分かったんだ。君が僕の家泊まってくれたら、そのことを三喜助じいさんたちに一緒に子どもを作る候補の女性だと報告するつもりだった」

「白い崖のことをわたしに教えてくれたのは子どもを作る為だと言うんですか」  
まったくお互いの会話が成立しない。

「違う。白い崖の写真を君に撮らせてあげたかったのは、ただ君のため。それで君がこの島の規則に合意してくれたら、そこで僕たちは子どもと一緒に作ろうと」

島の規則が何なのか教えて欲しいと言おうとしたとき、

「これは結婚とかプロポーズじゃないんだ。僕との子どもを産んでくれるか、くれないかだけの話なんだ」

圭介の言っている意味がますます分からなかった。

「子どもを産んで欲しいが結婚はしないということ？ さっきは島外の男は島外の女と結婚って」

七瑠美がそう返すと、

「そう、島での結婚自体が世間の一夫一婦制じゃないから」  
間を明けずに返事がきた。

「島民全体で子どもを育てる島独特の養育方法がある。島で生まれた子どもは島で育てる。ずっとこの島ではそうやって島民の暮らしを維持してきた。観光や移住者を拒みつづけるための策として」

圭介の顔が赤く上気してきた。

「分からない。昔はそうだったとしても、文明が進めば変わるのが普通じゃないですか。この島だって、電気やガス、水道は他の島と同じように整備されているし、電話だって、そう、Wi-Fiやモバイルデータ通信もできるじゃないですか。わたしのように外から来た者には違いが分かりません。亜玖祢島は何を外から守ろうとしているんですか？」

七瑠美は写真活動で訪ねた地方にも、排他的なところもあるのは知っていた。けれどこの島の制度は時代錯誤のように思えた。

「守るべきものは、なるだけ、少数のみ知るところとしておくのは分かるね？」  
分かる、という意味で頷いた。

「七瑠美が僕の子どもを産んでくれるなら、すべてを共有する。つまり〈島〉と結婚することになるんだ。子どもを作る男女はパートナーとでも言えばいいかな。それよりも僕が伝えたいと思っていることは、この島独自の美術や工芸のことなんだ。写真をする君が望むなら島でずっと創作を続けられる。君が外の世界で写真の作品創作することも止めたりはしない。でも、島を出ることは島との結婚は終わるということ。僕と君で島の子どもを作りたいというのは僕と同じ島の人間になって欲しいからだよ」

子どもを産んだあと、この島から出て行くのもいい？ それは「代理母」の役目と同じではないかと思った。七瑠美は圭介から「君が好きだ。だから僕と一緒に家族を作ろう」と言われた方が真剣に考えるのにも思った。

七瑠美の気持ちが変わったのか、圭介はそばに来て七瑠美にキスをした。

「分かるよ。僕が島の継続を担う立場じゃなければ、七瑠美と世間でいう結婚をして家族を作るだろう。島の人間になることはひとつの家族になることで、僕にはその関係こそが幸せであって、決して君を利用するという意図はないんだ」

その説明に思わず泣いてしまった。泣きながらこれが何の涙なのかよくわからなかった。圭介は七瑠美を抱き上げて寝室のベッドに静かにおろした。無言のまま七瑠美は服を脱がされていく。圭介の手が素肌を撫ぜることに声をあげて泣いた。

圭介は「いいかい」と七瑠美に呟いた。七瑠美は抗わなかった。

七瑠美は妊娠をした。圭介に生理がこなくなったことを告げると、次の日はどこから手に入れたのか妊娠検査キットを渡してくれた。それも早期妊娠検査薬とかで生理予定日から検査ができるケースに書いてある。トイレに行き数分待つと判定表示部分に赤色の縦ラインが現れたとき最初に思ったのは「圭介が喜んでくれる」だった。七瑠美は島に来ていなかったら妊娠どころか誰とも付き合うこともなかったと思う。両親は七瑠美が二十歳になるかならないかで相次いで病死し、七瑠美に兄弟はなく、両親たちにも兄弟はなかった。余儀なくひとり生きてきたせいかもしれない。

トイレのドアを開けると目の前に圭介がいた。検査キットを圭介に見せると思ったとおりに嬉しそうにガッツポーズをした。七瑠美が検査キットをゴミ箱に捨てようとしたら、「これプラスチックで包まれているから汚くないでしょ。だから生まれてきた子どもに見せる記念品一号にとっておくよ」と七瑠美の手から検査キットを持ち去った。

三喜助たちが祭り装束で圭介の家に来たのはその日の午後だった。太陽が海に沈む浜に圭介や伝承会の人たちに連れて行かれた。七瑠美にも白装束を着させて遠浅の海に膝のあたりまで入るように促される。沈みゆく太陽が海も空も真っ赤に染めていく中、七瑠美に対して、三喜助たちは浜に立ち並んで青い葉枝に紙垂れを付けた御幣を振り、祝詞を唱えている。酒と塩と石の載った三宝を海に浮かべ、七瑠美の首に白い玉状の寶石がついたペンダントを圭介が掛けに来てくれた。

それが儀式の終わりのようで圭介は七瑠美の背中に腕を回して浜に連れ戻してくれた。浜には知らぬ間に大勢の島民たちが来ていて、それぞれが両手を挙げて七瑠美を迎える仕事をしていた。

「これにて島人人間と認めることとなるけえ。よろうししゅうお願い申し上げたてまつる」三喜助は体を二つ折りにするくらいに深々とお辞儀をした。

「首ん付けちゆうは、巫玖祢島の白い崖の岩から採れる月長石ゆうんやで。この島の守神やでな、お腹の子どもを大事に育ててくれなはる」

そう言うとき三喜助は頭の上で手を合わせて拝んだ。

家に戻ると圭介は風呂に湯を溜めて三宝に載せていた塩を湯の中に入れた。七瑠美は緊張のせいもあって疲れを感じていた。単に疲れならば休めばいいのだが、もし何かあったらと怖いので明日には産婦人科病院に行きたいと圭介に言った。

七瑠美は勝手に、島に病院はないので島の外の病院に行くことになるだろうと思っていた。

「明日、『司の家』に行こう。島の子どもを宿した者は環状集落の家のひとつに住むことになるから、その下見にもなるし」圭介はさらりと言った。

「え？」と七瑠美が聞き返すと「司の家」は診療所兼助産師や医者、看護師の詰め所だと言った。外見からそんな設備がある家とは思いつかなかったので七瑠美はびつくりした。

朝、起きると体調はすっかりよくなっていたが、昨晚、寝床に着くときになって、圭介から妊娠初期は流産のリスクが高いからセックスはもちろん子宮に刺激を与えないようスキンシップも控えると言われたことのショックが尾を引いていた。やはり自分は子作りの道具でしかなかったのか。そんな七瑠美の気持ちに気づく様子もなく圭介は炊事場で朝食の準備をしていた。七瑠美が起きて洗面所に行くと圭介は「おはよう」と声をかけてきた。無



視してトイレに入り、出てくると目の前に圭介が立っていて「まだ体調が悪いの？」と心配そうに尋ねた。

それにも返事をせず、洗面所で顔を洗い始めたが感情が抑えきれず泣き出した。

「どうしたの」

圭介が七瑠美の肩を掴み自分の方に向けた。水に濡れた七瑠美の顔を見て圭介も分かったのか、そのまま自分の方に引き寄せ静かに抱きしめた。

「何が悲しいの。昨日、僕が言ったことで傷ついたの」

圭介の問いに七瑠美はますますしゃくり上げるように泣いた。

「よしよし。身も蓋もない僕の言い方が悪かったね。でも七瑠美も妊娠のせいでホルモンのバランスが乱れてるから、普段より感情の起伏が大きくなっているんだよ。ちよつと深呼吸してみようか」

そう言つて圭介は七瑠美の顔をタオルで拭き、もう一度抱き寄せて背中を上下に撫でた。七瑠美は圭介の腕の中でもたれかかるように脱力した。圭介の肌の温もりが伝わってくる。とそれまでの苛立ちや怒りが鎮まつていくのだった。

「さあ、ご飯を食べて診察に行こう」

圭介はそう言うと七瑠美をダイニングに連れていった。

車が走るのには前に亜熱帯植物園に行くときに通った道ではなく海岸沿いの道だった。風穴岩のある禁足地を車は横切つていく。自然に作られた岩のトンネルを抜けるともうそこは環状集落であった。

車を降りて集落に入ると、この前訪れたときとは違つて小屋の外に何人もの人が出ていた。七瑠美と目が合うと手を振つて笑顔を見せてくる。圭介も同じように手を振つて笑い合つていた。ここに来た時、自分は見て回つたつもりだったが実は見られていたのは七瑠美のほうだったのかもしれないと思つた。

「司の家」の前に着くと中から白衣を着た年配の女性が二人でできた。

「こんにちは、わたしは助産師、こっちは医師ね」

助産師の容姿は短髪でスポーツ選手のような筋肉質な体格で喋り方もさばさばした人だった。反対に医師だと言われた人は華奢な体つきとロングヘアにナチュラルな化粧をした女性だ。

「いまここには六名の妊婦や産後の母親がいます。ハウスの使い方やここでの規則は追々と言つていくので、まずは検診から始めましょう」

医師の女性が言った。

「はい、よろしくお願ひします。わたしは七瑠美といいます」

七瑠美は小屋のことをハウスというのだとそのギャップが面白いと思つたせいで、最後は笑いそうになった。

検診の結果は七瑠美にもお腹の胎児にもまったく問題がないということだった。診察を受けた「司の家」の設備は新しく、都心のクリニックに来たみたいだった。看護師の女性たちは助産師や医師より年若い人たちでここには男性の存在がみられなかった。

「司の家」で診断を受け、何日かすると圭介から母子手帳を渡された。どうやって申請したのかと訊くと島の役所からだと言ひ、役所には保健師も在籍しているから妊娠中の過ごし

方を面談して聞いておいでと言われる。本当にここでは（島の子ども）に関係するものだと万事整っていると思った。

圭介が仕事で島を離れる日がきた。妊娠が分かってから二週間が経っていた。これを妊娠週数で数えてみると前の生理の最後の日から検査まで六週間でそこから二週間プラスされるので、八週間になる。妊娠二カ月となっても体に何の変化も感じない。悪阻もまったくなかった。

ただ、大泣きしたあの日以来、圭介は一日一回、必ず七瑠美を抱きしめ背中を撫でることが日課となっていた。しばらく圭介と離れることになると聞いて、彼の前でまた泣きそうになるのを必死で我慢した。七瑠美はこれまでひとりでいることは平気だったと自分に言い聞かせ、これもホルモンバランスのせいだと大きく息を吸って吐いた。洗面具や着替えを鞆に詰めて圭介の待つ車に乗り込んだ。

七瑠美にあてがわれた「ハウス」は都心でいうワンルームと同じでここで暮らしてもまったく不便はない。電気も水道も全部通じている。ここに来て二日経ったころ、ハウスの外で何かの作業をしている妊婦に勇気を出して話しかけ、電気や水がどうやってハウスに届いているのか訊いた。

スレンダーな体にはち切れそうな丸いお腹をした妊婦が答えてくれた。

「電気は太陽光発電とT社の家庭用蓄電池でしょ。水は井戸からポンプで汲み上げるですよ」

その喋り方がひどく若い印象だった。

「ねえ、あなたはとつても若く感じるんだけどお幾つか訊いてもいい？」

彼女は七瑠美よりも五歳下だった。島外で生まれた子で母親が島出身の女子だったそうだ。彼女は島の男子と二十歳のときに結婚したのだそうだ。

気づけば、七瑠美の周りに若い女の子たちが集まってきた。妊婦もいれば赤ん坊をおんぶしている女の子もいる。

都心で生まれ育ったのに島の人と結婚することに躊躇はなかったのだろうか。七瑠美が質問すると、さつきとは違う妊婦が話してくれた。

「わたしたちは0歳のときから亜玖弥島に行き来をしているので、この島の構造が身に刷り込まれているんです。今つて、若い人は結婚をしない人も多いし、結婚しても子どもを作らなかつたり、作つても一人っ子でしょ。ここでは島の全員で子どもを育てるから精神的にも肉体的にも金銭的にも自分ひとりで苦しまなくていいんです」

彼女の明るい表情を見ると、ずっと疑問だったことを訊いてみる勇気が湧いてきた。「なるほど、生まれた場所や育つた場所が島ではなくてもみなさんは、しっかりと結びついてるんですね。でも、わたしは島とは何の繋がりもないんです。どうして圭介さんに子どもを作るうって言われたのかな」

今度は赤ん坊をおんぶした女の子が、

「わたしもそうなの。児童施設で育つて、高校卒業して就職した会社の取引先の人がこの島の人だった。付き合い始めてしばらくしたとき結婚しようつて言われたのね。わたしは孤児だからあなたの家族に反対されるつて言った。普通ならわたしみたいな親のいない子は結婚の障害になると思うじゃない。そしたら彼がここでの結婚の条件は親戚がいないことだ

よって言われたの」と言った。

七瑠美は思い当たることがあった。レトロ喫茶店の取材で店は家族で営んでいるという話になった時、インタビュー風景の写真を撮っていた七瑠美は「羨ましい」と思わず言ってしまった。店主が「何が？」と質問したのに対して取材していた先輩が「彼女は大学生のときに両親が亡くなっていまして、家族愛に飢えているんですよ」と冗談めかしてフォローしてくれた。圭介は七瑠美が取材にきた日から知っていたと言っていたから、この話を聞いていたのだろうか。

ハウスでは部屋の掃除と食事の準備は自分ですることがルールだった。食材や日用品は司の家に毎日届けられる。そこから分け合ってハウスに持って帰る。あとの時間は自分の好きなことに使ってよかった。このまえ妊婦たちに話しかけに行った時、彼女たちがしていた作業は草木染めの染料を作る工程だった。これは義務でも何でもなく、妊婦のひとりが大学で織物の専攻をしていて着物の染めをここでも続けているのだそう。彼女の影響もあり、妊娠も四カ月を過ぎ、そろそろ安定期に入るのを期に撮影を再開できるかどうか助産師に訊いてみた。答えは「創作は妊娠環境にも良いからやりなさい」と勧めてくれた。お腹がせり出してくる七カ月くらいまでがよいだろうと言われた。七瑠美は「白い崖」を撮りにこの島に来たことを改めて認識した。妊娠した今でもまだ見ぬ「白い崖」を撮りたい気持ちは持ち続けている。それをこの島では認めてくれるということが分かって嬉しかった。

この頃は月に数日程度しか圭介は島にいない。子どものために仕事の量を増やしているのだそう。七瑠美もハウスでの生活が馴染んできて圭介のいない日常に慣れてきた。

圭介が島に帰ってきた日に七瑠美はハウスから圭介の家に戻れるか訊いた。カゲさんから借りていた大判カメラをいよいよ使うときが来たのだ。

「安定期に入ったから助産師さんに撮影しても大丈夫って言われたの。明日、白い崖に行きたいんだけど連れて行ってもらえる？」

圭介は変わらぬ穏やかさで笑うと、

「やっぱり写真家になることは諦めてないんだね」

少し寂しそうな顔をした。

七瑠美はそんな先のことを考える余裕はないと思った。写真を撮りたいと思ったのは、草木染めの彼女たちの他にも、この島の人の中には粘土で作陶しガス窯で陶器を造る人もいるし、七瑠美が妊娠のときの儀式で付けた石のペンダントも手作りだった。その他にもこの島の人たちは、何かを作り上げる際にする材料や道具を見渡して、使えるかどうかを検討して作っていく。圭介の家の工事も設計図を緻密に描き、材料を調達して作ったのではないと工事にあった三喜助の伝承会のメンバーの人が言っていたのを聞いたことがある。だがうまく説明できないので返事はせずに、機材の準備にゲストルームに入った。

翌日、機材を車に積み込んで圭介の車で海岸沿いを走っていた。集落へ入る道を通り越し、森林の反対側に着いた。そこもまた丘状の起伏になっていた。上に立ってみると、足元から緑の絨毯を敷き詰めたような平原が扇のように広がり百メートル先で途切れている。

圭介に三脚とカメラバッグを持ってもらい、平原を歩く。下草の中にシロツメクサの花が咲いている。まるでここはおとぎ話の世界なのかと思えるほど空と海の平原の原色が際立

っている。

「素晴らしい景色、圭介さんが言つた通りだった」

七瑠美はこの場に導いてくれた圭介に何と礼を言つたらいいのか分からないくらいに感動していた。

「七瑠美、まだ感動するのは早いよ。ほら、もっとこっちに寄つておいで」

手招きする圭介がいるのは平原の高くなつた場所で、七瑠美が斜面を登りきると目の前に真っ白な断崖が延々と連なつて聳っていた。

もう言葉は出てこなかった。圭介から三脚とカメラを受け取り、構図を決めてセッティングした。黒布をカメラに被せピントをみる。画像が上下逆さまに映つているところにピントルーペを引つ付けて、露光時間を合わせた。そこにフィルムホルダーを挟み、引き蓋をゆつくりと引き抜いた。ケーブルリリースを右手に持つて親指で押した。

何時間ここにいただろう。持つてきていたフィルムを全部撮り切った。その間黙つて見守つてくれていた圭介が近づいてきて、

「すごい集中力だったね。僕もここに連れてきた甲斐があつたよ」

頭を優しく撫でてくれた。

「この白い崖の名前を覚えてあげるね」

圭介は七瑠美の頭をぐつと自分の胸に引き寄せた。

「七つ子の姉妹って言うんだ。ずっと昔にこの岩石から採れる月長石に価値があると分かつて島外から採掘する人間がやつてきた。そいつ等は乱暴者で島民の命に危険が生じたんだ。特に男たちが被害にあつてね。そのとき島を守つてくれたと言われているのが七人の姉妹で外部からこの島に立ち入れないように自らが犠牲になつて断崖へ姿を変えたっていう伝説があるんだ。でもね、こういう伝説や寓話の元ネタっていうのはちゃんとあるんだって分かる。離島では男は漁に出て、その間は女が島を守らなければならないよね。島全体で子育てする慣習ができたのはそれがあつたからだと思う。それと島の資源を外部に知られると荒らされてしまう。だから隠すことが義務付けられた。それが亜熱帯植物園という森林なんだと」

圭介のこもつた声は骨伝導で聞いているせいだろうか。ふと食堂のおばさんに教えてもらった夕日の浜のことを思い出した。海に浸かり太陽が沈むところを撮っているとき、その中に海で遊んでいた少女たちがいたことを。それを圭介に言うのと、

「きつとその子たちは島外で結婚した母親の子どもたちだよ」

七瑠美の頭をくちやくしゃに撫ぜながら大笑いした。

助産師が大丈夫だと言つてくれた妊娠七カ月までに白い崖に何十回も通つた。写真を撮るときもあれば、何も持たずに平原を歩き崖の縁に座つて海を何時間でも眺めることもあつた。

七カ月以降は海の中を撮つた小さな防水のデジタルカメラに持ち代えて、集落の女性や赤ん坊を撮つて回つた。これまでポートレートは撮らなかつたのに自分でも人を撮りたくなつたのが不思議だつた。撮つた写真データを本人に渡してあげると、すごく上手いと言つて喜ばれた。やがて評判が島の人にも伝わり、撮りに来て欲しいと頼まれるようになり、おにぎりをくれた食堂のおばさんや伝承会の集合写真なども撮つた。

「七瑠美、おめえ島のみんなを撮ったけなあ」

三喜助に言われたとき、七瑠美は無量の感慨を込めて、  
「島の多くの人が自分の得意なものを創作しておられました。お家に寄せてもらって作品を観せてもらい、作っているところとかも写真に撮らせてもらいました」と言った。

最後に行った先には高齢の人が何人もいた。みなひとり暮らしをしていたが、その人たちの面倒を都心のような介護ホームではなく、島民それぞれが無償で看ていることを知った。七瑠美がそのことを三喜助に感動しましたと言うと、

「赤ん坊はあ来た道、年寄りはお行く道やけえねえ」と返してくれた。

胎児は日に日に存在感を増し、最近では動くこともある。この子が産まれたとき七瑠美はどんな気持ちになるのだろう。やがて臨月になり、ハウスにひとりでいるときに破水した。

集落の女子たちが異変に気付いて司の家にみんな連れて行ってくれた。助産師は診察台に七瑠美を乗せると調べてくれた。子宮口がまだ四センチほどなので息んではダメだと言われた。バルーンを入れるからと言って、場所を離れて行った。

息んではダメと言われ不安で押しつぶされそうだった。まだ陣痛らしき痛みもきていないし、もし子どもに何かあったらどうすればいいのか。

看護師が代わって診察台の横に来てくれた。

「圭介さんには連絡されましたか？」と訊いてくれた。していないと言うと分かりましたと言って外に出て行った。

バルーンを入れられてから少ししたら、陣痛が始まった。それでも助産師は息むなど注意する。初産だからなのか分娩可能になる大きさに子宮口が開かず二〇時間以上経っていた。促進する点滴を打ちましょうと助産師が言った。それからまた何時間が経ったころ、目を開けると圭介が汗だくの顔で立っていた。

圭介が傍にいてくれたら、もう大丈夫だと七瑠美は安堵のため息をついた。

女の子だった。お包みの中の我が子は真っ赤でしわくちゃだった。この子が自分のお腹にいたのかと思うと愛しさが湧き出てくる。圭介が上から被さるように七瑠美と赤ん坊を覆った。その日は「司の家」の一室に圭介と泊まった。助産師が初乳は赤ん坊にとって大事だからと授乳のやり方を教えるにきた。圭介には母乳が出やすくなるように乳房のマッサージを教えている。

赤ん坊を島で育てるとはこういうことだったのかと分かったのはハウスに戻ってからだった。七瑠美のところに出産経験のある女性が当番のように毎日やってきて、七瑠美に授乳のやり方や赤ん坊の抱き方や寝かし方を教えてくれる。代わりに家事もしてくれた。別のハウスの母親たちも集まりアドバイスをくれたりした。

ひと月が経ちふた月があつという間に過ぎた。いろんな人の手を借りて子育てをしていると自分だけの子どもという感覚がなくなる。七瑠美も後から出産した母親を手伝ったり、他の子どもの面倒もみている。

集落では誰の赤ん坊であっても「ねね」と呼んだ。それと同じく女子を「まんま」男子を「ぱったー」と呼ぶのだ。それでは誰に向かって話しかけているか分からないときには、それぞれの名前の一部を付けて呼ぶ。七瑠美なら「なるまんま」となる。七瑠美と圭介の赤ん

坊の名前は「ちず」と名付けた。漢字で「千珠」と書く。この子を呼ぶときはみな「ちず」と呼ぶ。短い名前はそのまま呼ぶ風習があるからだ。

一歳になったとき、子どもたちは産みの親の元から離れ、集落の中で〈まゆだま〉という大きなハウスへ移される。七瑠美はどうして親から離すのかと圭介に問うた。すると圭介は島の者はなにながあっても上下の差を付けないことが決まりなのだと言う。三つ子の魂百までもと言う諺のごとく、幼少期に島民はみな同じだと身につけさすことで次の世代に引き継いでいけるのだ。

「原始、人間だつてこの地球のひとつの種族に過ぎなかったんだよ。僕はこの島の存在がそれを忘れていない証だと思う。七瑠美と僕は元を辿れば同じさ。七瑠美をここに誘ったのは誰と競うでもなく自分の好きなことをして生きられる場所だからだ」

圭介は七瑠美を抱き寄せようと手を伸ばした。七瑠美はそれを避けた。もし抱きしめられたらここに居続けてしまう。

「白い崖を撮ったフィルムを現像してプリントしたい」と言った。それは島を出るという意味でもあった。

圭介は少し考え、頷き承諾してくれた。

島を出て行く日はしとしとと雨が降っていた。船着き場に大勢の島の人たちがいる。圭介や三喜助も見送ってくれた。

「あんたんこたあ、忘れんよ。がんばりなんせえや」

三喜助が目を擦りながら言った。他の人も誰ひとり咎める人はいなかった。二年余りの間に七瑠美を島の人間と認めてくれていた。出て行くことも含めて。

七瑠美はこれ以上みんなの視線を受けていられず船内に入った。船内でも話かけてくる人はいなかった。

都心に戻ってきた。七瑠美が住んでいた家は圭介が管理してくれていたので問題なく住める状態だったが、車の騒音や人の話し声、物音が耳障りでならなかった。キャリアバッグを開けて中の物を取り出す。島で着ていた服は全部残してきた。最初に自分が持っていた服は数着であるとは圭介が都心に出たときに買ってきてくれた服だった。中にあるのは日用品とハウスを出る時に集落の女性たちがくれた餞別の品だ。草木染めの布で縫ったポーチを手に取りると色染めする桶を囲んで他愛もない話で笑っていた日を思い出し、胸が締めつけられる。最後にカメラやレンズを出すと底に白い石のペンダントがでてきた。妊娠の儀式のときに圭介が掛けてくれた物だ。それを改めて首に掛けてみる。圭介の手の感触が首元に蘇るようで慌てて外した。

七瑠美はカメラやフィルムの整理を終え、意を決してカゲさんに電話をした。戻ると決めた時に思ったのがカゲさんに対して、とんでもない不義理をしてしまったことだった。島に来て半年が過ぎた頃、カゲさん宛ての手紙を圭介に託して都心のポストから投函してもらったのが最後だ。カゲさんに何と書かれても七瑠美は謝るしかない。

「手紙にしばらく帰れなくなったと書いてたんで、何かあったんじゃないかって心配してたんだぞ。電話も繋がらんし、メールしても返信こないし」

カゲさんは七瑠美がどこで何をしていたのか話すのを待っている様子だった。七瑠美がひたすら謝り続けるだけなので何も訊いてこなかった。カゲさんとはかく顔を見せに来

いと言った。七瑠美は明日にでも借りていたカメラを返しに行きますと電話を切った。

入口にスタジオカゲと看板が出ている。それはカゲさんのお父さんが経営していた写真DPE店のときのものらしい。迎えてくれたカゲさんはいつものカゲさんだった。中に通され仕事場に入る。機材の棚にはカメラやレンズがぎっしり詰まっている。その奥に暗室があり、ドア越しにモーターの音が聞こえてくる。

長期にカメラを借りたお詫びも含めて謝礼金を入れた封筒を差し出した。するとカゲさんは「そんなものいいわ」と手を撥ねた。電話では訊かれなかったが、さすがに会ったらどこで何をしていたのか訊かれるだろうと観念していた。ここでもカゲさんは次に七瑠美が何を言うのか待っていた。どこまで話せばいいのか逡巡した末、何も言わないことにした。すこし間を置いて、大判カメラのフィルム現像をカゲさんの友だちのプリンターさんに頼みたいと、ホルダーの入ったシールドバッグを渡した。カゲさんは「よっしゃ」と言っ受けて取ってくれた。また七瑠美の話す番がきた。データ保存をしている写真画像をカゲさんに観てくれますかと訊いた。「おう」と頷いた。

無言で写真画像をスライドしているカゲさんを七瑠美はじっと見ていた。カゲさんは見終わって、

「これ推薦してやるよ。ちょうど今な、パリでコマージュギャラリーを経営している日本人が写真家協会にこれからの日本の新鋭写真家たちで写真展をするから候補者を集めて欲しいって依頼がきててな、俺もひとり推薦する予定だったんだよ。ちょうどよかったわ」

カゲさんが気に入ってくれたのは海に太陽が沈む浜で七人の少女たちが戯れている写真だった。特に海に融け込むように人が乱舞している海中の構図がいいと言ってくれた。人は海からやってきたという神話を写真で表現しなかったのだと説明した。

「神話な。それは伝わってくるよ。それにしても七瑠美は人を撮らなかったのに、ここにはポートレートばかりじゃないか。面白いなあ」

カゲさんは「上手い」写真が「いい」とは違うと言う。「面白い」が最高の誉め言葉だったのを七瑠美は聞いて知っていた。

「おい、大丈夫か？ 推薦してもいいだろう」

七瑠美が感じ入っているとカゲさんは大きな声で返事を求めてきた。

「お願いします」と深く頭を下げた。

大判カメラの現像は一週間後に出来上がった。カゲさんのラボを借りてカラープリントをさせてもらう。カラーフィルムのプリントは初めてだったのでカゲさんの指導のもとで焼いた。半切の印画紙に焼き付けて、プロセッサに通すのだが、フィルターのYとMのメモリーを調節することで自分好みの色が出せる。テストピースがプロセッサから出てきたとき、カゲさんはおおっと声をあげた。そこに写っているのは白い崖と緑の平原だったのだ。七瑠美は撮影のときにレンズにソフトフィルターをつけて霞の中で撮影したような幻想的な雰囲気にしたのだ。そうした理由は鮮明な写真だと場所を特定されるかもしれないと思ったからだった。

プリントをしてから一カ月が経ち、七瑠美のところへパリのギャラリストから正式な出張依頼とパリに来るよう連絡がきた。展示する写真と向こうで販売するために写真のエディションを各十枚にすることにした。有難いことにカゲさんの勧めでプリントの販売をネット上でしてみたなら何枚かがすぐに売れた。カゲさんのデザインと構成でダミーブックも

作った。島に行く前だったら、七瑠美が望んでいたのはこういう自分なはずだった。しかし事が順調に進むほどに〈島〉での大切な思い出が強い力で半ば強制的に外部に引つ張り出されるような感覚に襲われた。このまま空っぽになったら本当に〈島〉の一員でなくなってしまう。

空港の出発ロビーには同じ便に乗る出展者たちがいた。その人たちは仲良さそうに喋っている。七瑠美は誰とも面識がなかった。挨拶をするどこかで聞いたことのある名前ばかりだった。七瑠美を含めると女性は三人で男性は二人の五人だった。パリではエアビーで部屋を借りて、一緒に寝泊りすることになっている。

シャルルドゴール空港からはタクシーに乗った。ギャラリーに着くと日本人と思しき女性が出迎えてくれた。彼女は日本名ではなく呼び名として使っている〈シルビイ〉と名乗った。ギャラリーでは展示専門の職人がインストールしている最中だった。それぞれが自分の写真と他の人の写真を見比べて、話をしているが七瑠美はそこには入らず額装された自分のプリントをずっと観ていた。

シルビイが控室に紅茶を入れたからと呼んできた。テーブルにつくと、それぞれが自己紹介で自分の写真について話すよう言われた。ある人は都会の風俗がテーマだといい、風俗の意味は社会集団の生活上の衣食住だと付け足した。また別の人はいまの若者がテーマだと言った。七瑠美の番になり海の人の神話を題材にしたと言った。あとのふたりはランドスケープと建築物だった。

シルビイは話を聞きながらメモをしていた。書き終えると、全員に向かって明日が初日で夜にベルニサーージュをすると言った。みんながきよんとした顔をしているので彼女はオープンニングパーティーだと言い直してくれた。

パーティー当日のギャラリーは満員電車のように人で溢れていた。歩く隙間もない中、シルビイから自分の展示の前にそれぞれが立つように指示される。七瑠美はダミーブックとポートフォリオを乗せたミニテーブルに身を寄せてなるべく話かけられないようにして立っていた。離れた場所から七瑠美の態度を見かねたシルビイが七瑠美を引っ張り、七瑠美のダミーブックを見ていた高齢の女性に近づけた。シルビイがその女性にこの作品の作者ですとフランス語で紹介した、と思う。その女性は七瑠美の大判カメラで撮った写真を指さして、「セブンシスターズ」と言った。それには七瑠美が驚くことになった。なぜなら圭介がこの場所の謂れが「七つ子の姉妹」と言っていたからだ。

シルビイはその女性と二、三会話を交わした。何を話していたのか訊くと、この写真にある白い崖と同じような場所がイギリス海峡にあつて、通称をセブンシスターズと言うのだから。

同じ白い崖で名前も同じということに興奮が収まらなかった。七瑠美はすぐスマートフォンの「セブンシスターズ」と打ち込んで場所を調べた。ロンドンの地下鉄の駅が出てきたがそんな訳はないと思い、画面を繰っていくとイギリス南部の街に近く、海峡を挟んでフランスと向かい合う場所だと分かった。写真を開くと亜玖祢島の「七つ子の姉妹」とそっくりの白い崖が出てきた。

時間は日付を跨ぐようとしていた。それでもギャラリーの中には半数以上の人が残っていてワインと軽食を摘まみながら談笑していた。七瑠美はオープンからいままで飲まず食わずで質問してくる観覧者に受け答えしていた。シルビイが案内してくるときは彼女が通訳



をしてくれるが、そうでないときは七瑠美が拙い英語と翻訳アプリでやり取りした。そのおかげもあって、プリントも高齢の女性を含め何人かに買って貰えた。

やっとギャラリーの中を観て回れる雰囲気になったので、女性の展示ブースを観に行つた。彼女は建物の写真を撮っていた。先に話しかけてくれたのは彼女だった。「もうすぐ発表されるそうですよ」と言った。「何が？」と訊くと、「あそこ」と言つてフォトブックが並べられている場所を指さした。

今回の写真展は展示だけではなく、ダミーブックのコンペが同時に開催されている。七瑠美もカゲさんの勧めでダミーブックを作ったのはその為だった。このコンペに優勝すると写真集を作ってもらえ、パリで開催される最大級のフォトフェスに個展展示で参加できるのだ。彼女は「わたし、このコンペにかけてるんです」と言う。七瑠美は彼女の勢いに押し倒されそうだった。

シルビイがワイングラスをフォークで叩いた。雑談の声が一気に静まる。

「ダミーブックアワードの結果が出ました」と日本語で言つたあとフランス語で話した。

「まずショートリストを発表します」と言つて三名の名前を言つた。残念ながらギャラリーで展示している五人の名前は誰も呼ばれなかった。このコンテストの応募条件は日本人であることだった。七瑠美たち五人の他にも数十名がエントリーしていた。ショートリストの三人の写真集をシルビイが手に持つて観覧者に見せる。ひとりにはアメリカのロックバンドとツアーの移動に同乗した男性のスナップ写真、もうひとりには自分の住む家の塀に生えた雑草を撮り続けた写真、優勝したのは何組もの双子のポートレイトを撮つた写真だった。

七瑠美の隣で彼女が泣いていた。七瑠美は自分が悲しくも悔しくもないことに気がついた。そもそもこの場所に居ることの違和感があった。プリントが売れたときにも気持ちが高揚しなかったのだ。

ギャラリーが休廊の日を待つて、七瑠美はユーロスターでロンドンに行き、そこから電車とバスを乗り継いでセブンシスターズパークで降りた。すぐそこかと思つたら大違いで同じバスから降りた人たちと一緒に一時間近く歩いて、ようやく見えてきたのは草原に点々という羊の向こうの白い崖だった。ギャラリーで高齢の女性が七瑠美の写真を観て「セブンシスターズ」だと言つたのも無理はないと思つた。

観光ガイドでは海を隔てたフランス側から遠目に見ると、崖がまるで七人の姉妹のように見えたことから名づけられたと書いてあった。有名な観光地のはずだが人の姿は見当たらない。バスで一緒だった観光客たちはどこに行つてしまったのだろうか。かえて人がいないう方が好都合で七瑠美は島でしているように平原の上に座り白い崖と海と空を眺めはじめた。海を渡る緩やかな風が七瑠美を包むように吹いてくる。目を瞑り波の音を聞いていると、風に運ばれて小さな女の子の声が聞こえてきた。

「ぼったー、嫌、まんまがいい。ごめんねー」

はっとして目を開けた。ここに日本人がいるのか、それも島の子どもが大人を呼ぶときの呼び名を使うなんてと、立ち上がつて辺りを探した。

「ちざー」居るはずもない我が子の名を叫んだ。七瑠美の声は白い崖に当たつて戻ってきた。すると草原にいた羊たちが一斉に七瑠美の方を見た。反射的に鞆からカメラを取り出して撮つた。カシヤ、カシヤとシャッターの音が鳴るたびに七瑠美の中に島で暮らしていた自分の姿が蘇ってくる。ハウスで暮らした「まんま」であった自分、島の人と風景を写真に撮つ

ていた自分、そして白い崖を何十回も訪れていた自分。白い崖の見える平原に座っていると  
きは不安など微塵もなく安寧な心地でいられた。いまこうして同じように白い崖の前に座  
っていると同張っていた体が解きほぐされていく。それは〈島〉の一員として生活していた  
自分に戻っているのだと。春、落葉樹に新芽がつき路傍に花が咲く。夏、太陽が島の隅々ま  
で光を注ぎ、海と空の境界線を白い飛沫が跳ねる。秋、畑や果樹で収穫された野菜や果物を  
分け合って食べる。冬、白い崖に高い波が打ち寄せ、平原も森林も静寂の時を過ごす。島の  
人達は祖先が海から来た信じ自然に畏敬の念を持ち、弱い者を庇い支え合っていた。その  
ままの自分でいいのだ。島民は皆〈島〉の一員であってそれ以外何者でもなく、〈島〉は人  
を抱擁する小宇宙だったのだ。戻ってきて、こちらの世界を七瑠美の体が拒絶した。この場  
所に来て、その理由が分かった。この世界には人を評価する審判たる者、競い合う者、脱落  
した者しかない。生きることが自分自身を絞めつける。前へ前へ進まなければ、振り落と  
される。誰も人を庇う余裕などない。なぜならばこちらの世界はすべてが人間だけで成立し  
ているから。

〈島に戻ろう〉

七瑠美は白い崖へ向かい歩き出した。羊たちが点在する平原を通り、白い崖の縁まで来た。  
延々と続く白い崖を見つめていると辺りが白く霞んできた。空と海の間を白い崖が伸びて  
いく。崖の上に立った七瑠美を〈島〉の白い崖へと運んで行った。

懐かしい〈島〉の白い崖から「まんま、お帰り」という声がする。足元の平原に咲くシロ  
ツメクサ、海から来る穏やかな風、ここが〈島〉である徴だ。

森林を通り抜けると環状集落の入口はもう目の前にある。